

〔 研 究 主 題 〕

児童生徒の豊かな人間関係づくりに関する研究
 － SNSの利用による友人関係への影響に着目して－

1 研究のねらい

現在の児童生徒は、幼い時からインターネットや携帯電話等のICTメディアに囲まれて育ったデジタルネイティブ世代と言われ、知りたい情報をすぐに検索・収集したり、遠距離でも様々なやり取りを効率的に行ったりする一方、長時間の利用による生活習慣の乱れや心身の不調、匿名による誹謗中傷など、いわゆる「ネットいじめ」の問題が生じている。さらに、スマートフォンの普及に伴いLINEなどの無料通話アプリ等のソーシャル・ネットワーキング・サービス(以下「SNS」という。)を利用する児童生徒が増加しており、インターネットでのつながりは日常的な営みとなっている。しかし、SNSでは、顔が見えない相手と文字でやり取りをするため、伝えたいことの真意が伝わりにくく、誤解が生じたり、感情がもつれてしまったりして、その結果、SNSを通しての人間関係に悩む児童生徒も少なくないことが予想される。

そこで、本研究では、SNSを利用する児童生徒が増加している中で、児童生徒の友人関係における実態を「学校楽しいと」等の調査から多面的に分析・考察し、人間関係を豊かにする指導・支援の在り方を明らかにすることをねらいとした。

2 研究の内容

- (1) 教師対象の調査から、教師が学校生活から捉えている児童生徒の姿（見方・捉え方）と、人間関係づくりの取組状況を把握する。
- (2) 児童生徒対象の調査から、SNSの利用の実態と学校適応感、友人関係との関連性を分析し、現状の課題について把握する。
- (3) 児童生徒及び教師の調査、研究協力員の実践から課題と解決する視点を整理し、「豊かな人間関係づくり」のモデルプランを作成する。

3 実態調査の概要

- (1) 教師対象調査（平成27年6～12月実施）
 教師対象の調査は、生徒指導力向上プログラムや移動講座、校内研修等の出席者に回答を依頼した。質問紙は児童生徒と同様にマークシート式で作成した。
- (2) 児童生徒対象調査（平成27年6～7月実施）
 小学校と中学校は、小学校12学級以上、中学校6学級以上である学校規模を基準に各教育事務所管内から各1校、鹿児島市教育委員会管轄から2校を抽出してもらい、小学校は6年生、中学校は2年生を対象に実施した。一方、高等学校は、鹿児島市から2校、各学区から1校を当課で抽出（普通科3校、専門科4校）し、各校1・2年生で実施した。質問紙はマークシート式で作成し、回答の集約は当課で行った。

4 教師対象の調査結果と分析

- (1) 回答者数
 有効回答者は小学校221人、中学校162人、高校160人、特別支援学校20人の計563人であった。
- (2) 教師の捉えている児童生徒について
 教師が児童生徒をどのように捉えているかを「学校生活」、「友達関係」、「SNS利用」の3つの観点から調査した結果を表1に示す。

表1 「学校生活」、「友達関係」、「SNS利用」の3観点による分析結果

■ 児童生徒の学校生活に関する内容 ・ 感情をコントロールできない児童生徒が増えている。	とても思う	思う	あまり思わない	思わない
	11.9%	62.5%	24.5%	1.1%
・ 自分の思いや考えを伝えることを苦手にし、自己表現力が乏しい児童生徒が増えている。	とても思う	思う	あまり思わない	思わない
	23.2%	66.7%	9.4%	0.7%
■ 児童生徒の友達関係に関する内容 ・ 新たな友達との関係をつくることを苦手に行っている児童生徒が増えている。	とても思う	思う	あまり思わない	思わない
	6.4%	54.1%	38.5%	1.0%

・ 良好な友達関係であっても本音を隠す児童生徒が増えている。	とても思う	思う	あまり思わない	思わない
	10.1%	63.4%	25.5%	1.1%
■ SNSに関する内容				
・ LINEなどのSNSでのやり取りがきっかけで友達関係に悩むようになった児童生徒が増えている。	とても思う	思う	あまり思わない	思わない
	22.6%	43.3%	22.7%	11.5%
・ LINEなどSNSの利用が原因で、精神的に不安定になった児童生徒が増えている。	とても思う	思う	あまり思わない	思わない
	10.3%	41.7%	35.4%	12.5%

(3) 人間関係づくりの取組状況の実態

児童生徒の友達関係づくりをねらいとする年間計画の取組の状況については、「学校で年間計画を立てている (38.7%)」、「学年で年間計画を立てている (5.6%)」、「自分なりに年間計画を立てている (11.2%)」、「年間計画はない (44.5%)」の結果であった。

5 児童生徒対象の調査結果と分析

(1) 回答者数

児童生徒の有効回答者は2,307人で詳細は表2に示す。

表2 児童生徒調査の有効回答者数の属性とSNSの利用の有無

校 種	小学校6年生		中学校2年生		高校1年生		高校2年生	
性 別	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
SNSをする	148 (42.3%)	185 (53.2%)	199 (57.0%)	213 (69.6%)	193 (96.0%)	267 (95.7%)	206 (95.8%)	253 (97.7%)
SNSをしない	202 (57.7%)	163 (46.8%)	150 (43.0%)	93 (30.4%)	8 (4.0%)	12 (4.3%)	9 (4.2%)	6 (2.3%)
合 計	350	348	349	306	201	279	215	259

単位：人（ ）：該当学年に対する割合

(2) SNSを利用する児童生徒と利用しない児童生徒の比較分析

学年ごとにSNSを利用するグループと利用しないグループに分けて「学校楽しいと」の7観点^{※1)}と下位項目^{※2)}の平均値を統計処理による比較分析をした結果、有意な差があった観点と項目を表3に示す。また、「休み時間や昼休みの時間の友達との過ごし方」の質問についても同様に比較分析をした結果、「SNSを利用するグループが友達と一緒に過ごす」と多くが回答していた。

表3 SNSを利用しない児童生徒と利用する児童生徒の比較から明らかになった実態

【 小学6年生のSNSをする児童 】 ○はプラスの影響 ●はマイナスの影響 △は影響なし ・ 「学校楽しいと」7観点の比較 △ 有意な差のある観点は無い。 ・ 「学校楽しいと」下位項目の比較 ○ 「自分が困っているときに助けてくれたり、協力してくれたりする友達がいる。」と多くが回答。 ● 「頭が痛くなるときがある。」と多くが回答。 【 中学2年生のSNSをする生徒 】 ・ 「学校楽しいと」7観点の比較 ○ 平均値が有意に高い観点は「友達との関係」の1観点。 ● 平均値が有意に低い観点は「教師との関係」「学習意欲」「心身の状態」の3観点。 ・ 「学校楽しいと」下位項目の比較 ○ 「自分が困っているときに助けてくれたり、協力してくれたりする友達がいる。」「学級の中にいると、明るく楽しい気持ちになる。」と多くが回答。 ● 「気分が悪くなるときがある。」「友達から悪口を言われたり、無視されたりしてつらい思いをすることがある。」と多くが回答。 【 高校生のSNSをする生徒 】 ・ 「学校楽しいと」7観点の比較 ○ 1・2年生ともに平均値が有意に高い観点は「友達との関係」,「学級集団における適応感」の2観点。 ○ 1年生は「自己肯定感」も平均値が有意に高い観点であった。 ・ 「学校楽しいと」下位項目の比較 ○ 「気軽に話せる友達、自分の悩みや本当の気持ちを話せる友達がいる。」「自分が困っているときに助けてくれたり、協力してくれたりする友達がいる。」「学級の人々と一緒に学校行事に参加したり、活動したりするのは楽しい。」「この学級の一員でよかったと思うことがある。」と多くが回答。

1) 各観点とは「友達との関係」、「教師との関係」、「学習意欲」、「自己肯定感」、「心身の状態」、「学級集団における適応感」「いじめ」の7観点。

2) 下位項目は、「友達との関係」、「心身の状態」、「学級集団における適応感」、「いじめ」の4観点を構成する質問。

(3) SNSを利用する児童生徒の傾向と特徴

ア 学年間の分析

学年ごとにルールや負担感などSNSの意識に関する質問を整理した観点^{※3)}（小・中学校4観点、高校5観点）の関連性について統計処理による分析をした結果、特に顕著な傾向と特徴を示したものを表4に記す。

表4 SNSを利用する児童生徒の学年間での傾向と特徴

- SNSをめぐるトラブルが発生した際は、直接会話で気持ちを伝えたり、教師や親に相談しようとする意識のある女子生徒は、メッセージをすぐに応答しないといけないプレッシャーを感じていない（高校1年生女子）。
- 送信相手のやりとりの関係で悩んだり、負担に感じたりする児童生徒は、メッセージをすぐに応答しないといけないプレッシャーを感じている（小学6年生・中学2年生・高校1年生・高校2年生）。
- SNSのやりとりで相手とつながりを感じている児童は、送信相手とのやりとりで悩んだり、メッセージをすぐに応答しないといけないプレッシャーを感じている（小学6年生男子）。

イ 男女間の分析

SNSを利用するグループを学年ごとに男子と女子に分けて、SNS観点とその下位項目の平均値の比較を統計処理で分析した結果、特に性差の見られた傾向と特徴を表5に示す。

表5 SNSを利用する児童生徒の男女間で明らかになった実態

- 【 SNSを利用する男子児童生徒 】 ○はプラスの影響 ●はマイナスの影響
- 高校1年生の男子は、同じ学年の女子より「個人情報を出さないようにしている。」と多くが回答。
 - 「SNSをよく利用する」と回答する小学6年生の男子は、同じく回答する女子より「即レス」の悩み・負担感を感じると多くが回答。
 - 「メールやチャットの利用時間（平日）が2時間以上である」と回答する中学2年生の男子は、同じく回答する女子より「友達との関係は良くない。」と多くが回答。
 - 高校1年生の男子は、同じ学年の女子より「メッセージがきたらすぐに返事をする。」、「友達から送られてくるメッセージをチェックすること。」と多くが回答。
- 【 SNSを利用する女子児童生徒 】
- 小学6年生、高校1年生の女子は、同じ学年の男子より「メッセージを送る前に問題がないか確認している。」と多くが回答。
 - 中学2年生、高校1・2年生の女子は、同じ学年の男子より「相手が不愉快な気持ちになるような内容は書かないようにしている。」、「友達とのやり取りで困ったときは親や先生に相談するようにしている。」と多くが回答。
 - 高校1・2年生の女子は、同じ学年の男子より「メールやチャットをしている友達とより親しくなっている。」、「友達の気持ちを確かめることができる。」、「つながりをもてる。」と多くが回答。
 - 高校1・2年生の女子は、同じ学年の男子より「平日、休日の利用時間が長い。」と多くが回答。
 - 「メールやチャットでのやり取りが原因で疲れやストレスを感じる」と回答する中学2年生の女子は、同じく回答する男子より「SNSのやりとりをする相手との関係性」の悩み・負担感を感じると多くが回答。
 - 高校2年生の女子は、同じ学年の男子より「メールやチャットでのやり取りの利用が原因で、疲れやストレスを感じている。」、「送信後、あの伝え方で良かったのだろうかと悩む。」と多くが回答。

6 実態調査結果の考察

教師対象の実態調査の結果からは、「感情のコントロールができない、自己表現力が乏しい。」、「新しい関係づくりを苦手にする、良好な関係でも本音を隠す。」、「SNSのやり取りで友達関係に悩む、精神的に不安定になる。」児童生徒が増えていると捉えている教師が多いことが明らかとなった。一方、児童生徒の友達関係づくりを促す取組状況については、「年間計画はない。」と回答する教師が約4割の状況であることが明らかとなった。このことから、多くの教師は児童生徒の人間関係づくりの指導・支援の重要性を理解しているものの、その取組については積極的な実践ができないでいる状態があり、「豊かな人間関係づくり」のモデルプランの必要性が明確になった。

児童生徒対象の実態調査の分析により、SNSを利用しない児童生徒は、SNSを利用する児童生徒と比較して、友達関係に悩んでおり、学級集団における適応感が低いことが明らかとなっ

3) SNSの各観点とは『SNSをめぐるトラブル』への対処の意識（高校は『SNSをめぐるトラブル』への発生後の対処の意識）と『SNSをめぐるトラブル』への備えの意識に区別）、『やりとりをする相手との関係性』の悩み・負担感、『即レス（即時に返事をする）』の悩み・負担感、『SNS利用のやりとり』の親和性の観点。

た。よって、SNSを利用しない児童生徒は、学級集団に対して疎外感をもち人間関係が希薄になりやすいことから、学校適応感を高める指導・支援が特に必要であることが明確になった。一方、SNSを利用して悩みや気持ちを話せたり、助けを求めたりするような友達とより親しい関係を築くことができる児童生徒は、クラスの所属感が高まる傾向が見られるが、送信相手との関係性の悩みや負担感を感じるようになったり、SNSのやり取りが原因で疲れやストレスを感じるようになったりすることも明らかとなった。このようなことから、SNSを利用する児童生徒は、SNSの相手との関係やメッセージの応答に悩むようになりやすいため、対面で自分の気持ちや思いを伝えるコミュニケーション力を高める指導・支援が特に必要であると明確になった。

7 「豊かな人間関係づくり」のモデルプランの作成

(1) 「豊かな人間関係づくり」のモデルプランの視点

児童生徒対象の実態調査の結果から、「豊かな人間関係づくり」のモデルプランにおいては、次の視点による指導・支援が特に重要となる。

- 人間関係がまだ十分に形成されていない新学期の始めに、他者との関わりの中で自己理解・他者理解を深めるとともに他者を思いやる「自他の理解」を育む視点
- SNSを利用しない児童生徒には、分け隔てなく互いの存在を理解して尊敬し合える「他者や集団への適応」を育む視点
- SNSを利用する児童生徒には、SNS上での不快な感情を抱え込まずに相手に伝えたり相談したりしてより良い関係を図れるようにし、また、SNSで交流するグループ以外の児童生徒とも関わりをもてるようにするなど「他者と交流する実践力」を育む視点

(2) モデルプランの取組を検証するための方法

調査研究の1年目は、研究協力員に、学級の実態調査の結果に基づいてSNS利用の影響を踏まえた人間関係づくりを実践してもらった。実践の成果については、児童生徒が自己評価で「できる・できない」を回答する「クラスでの友人関係に関する」質問紙で検証した。質問紙は、栃木県教育委員会の「望ましい人間関係を構築する能力を育成するための指導・援助の在り方」※4)を参考にして作成し、質問項目は「豊かな人間関係づくり」の観点を分析できるように「自他の理解」は「自己理解・他者理解（共感性）」、「他者や集団への適応」は「協調的行動・適応的行動」、「他者と交流する実践力」は「表現行動・コミュニケーション行動・問題解決の場面」の項目を設定した。また、児童生徒の回答から変容を視覚的に確認できるように、調査の1回目と2回目の結果をレーダーチャートと点グラフ、帯グラフで表示するようにした（図1）。

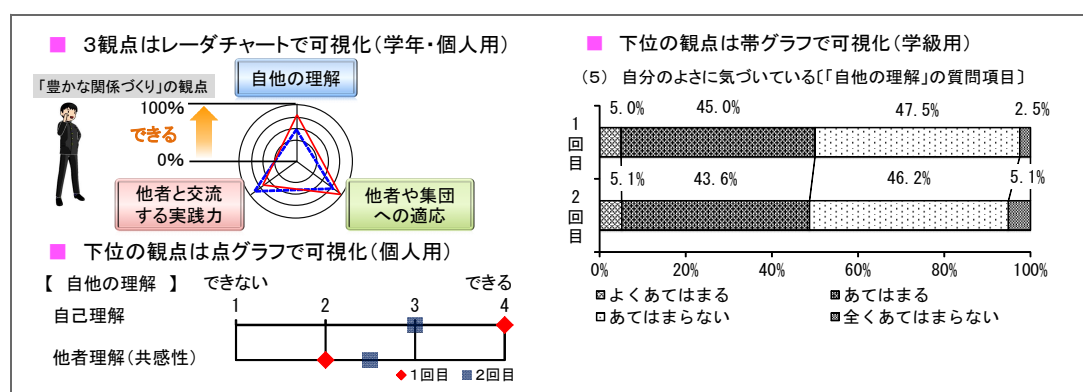


図1 「豊かな人間関係づくり」の観点の表示するレーダーチャートと点グラフ、帯グラフ

8 今後の計画

(1) 「豊かな人間関係づくり」のモデルプランの提案

実態調査の結果と研究協力員の検証を総合的に整理し、「豊かな人間関係づくり」をねらいとするモデルプランを提示する。

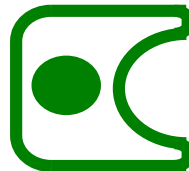
(2) SNS利用の影響を踏まえた人間関係づくりの具体的な方策の検討

研究協力員によるモデルプランによる実践の成果を検証し、指導・支援で効果のあったアプローチや機を捉えての集団や個別的な対応の在り方について方策を検討する。

4) 栃木県教育委員会 「望ましい人間関係を構築する能力を育成するための指導・援助の在り方」

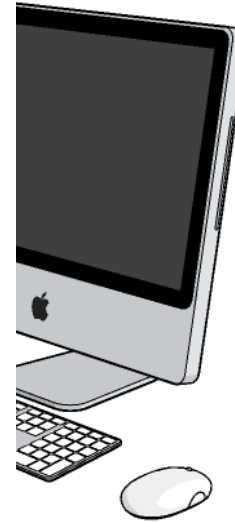
第8分科会 教育相談課 調査研究発表

児童生徒の豊かな人間関係づくりに関する研究
ーSNSの利用による友人関係への影響に着目してー



鹿児島県総合教育センター
教育相談課

1 研究のねらい



24時間どこにいてもネットにつながる生活
デジタルネイティブ世代

- 知りたい情報をすぐに検索・収集
- 遠距離でも様々なやり取りを効率的にできる

SNS(ソーシャル・ネットワーキング・サービス)

メールやテキストチャットによるメッセージのやり取り



送信

友達じゃない

エッ！
どういうこと？

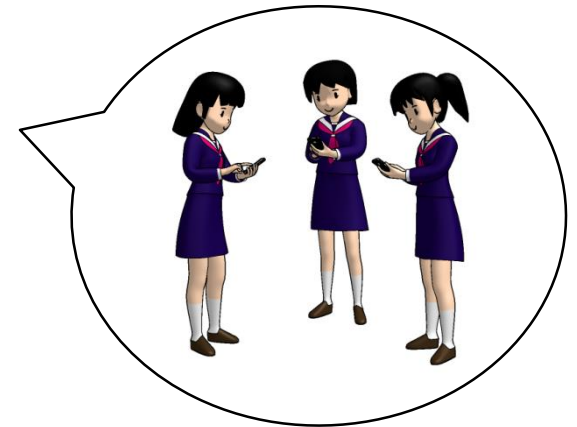


- 表情などの非言語的コミュニケーションを気にせずやりとりをしてしまう。
- 真意が伝わりにくいために、誤解が生じたり、感情的になったりしてしまう。



「今の子供たちの友達関係はどうなっているんだろう？」

「こんな時、どのように声を掛けたいのだろうか？」



「メールやチャットだと、伝えやすいんだけど・・・。」

所属感・自己肯定感への影響も

1 研究のねらい

S N S を利用する児童生徒が増加している傾向の中で，児童生徒の友人関係における実態を「学校楽しいーと」等の調査から多面的に考察し，人間関係を豊かにする指導・支援の在り方を明らかにする。



S N S をする友達



S N S をしない友達



2 研究の内容

3 実態調査の概要

研究の内容

■ 児童生徒対象の調査 (H27年度)

- SNSの利用状況が学校適応感や友人関係に及ぼしている影響



SNSをする友達



SNSをしない友達



「豊かな人間関係づくり」のモデルプラン（H28年度）

■ 教師対象の調査 (H27年度)

- 児童生徒の観察から捉えている姿
- 関係づくりの取組状況



■ 研究協力員の実践 (H27・28年度)

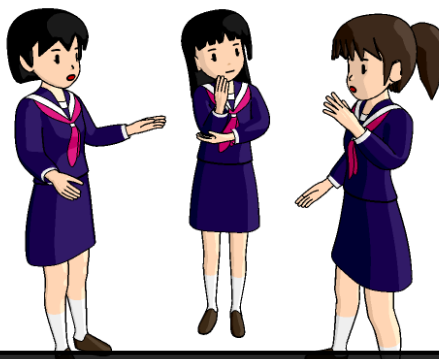
- 人間関係づくりの具体的な方策を実践
- 成果の検証



■ 教師対象の調査（平成27年6～12月実施）



学校生活に関する内容



友達関係に関する内容



SNS利用に関する内容

児童生徒の観察から捉えている意識



児童生徒に対する働き掛けの実態

取組の状況

年間計画

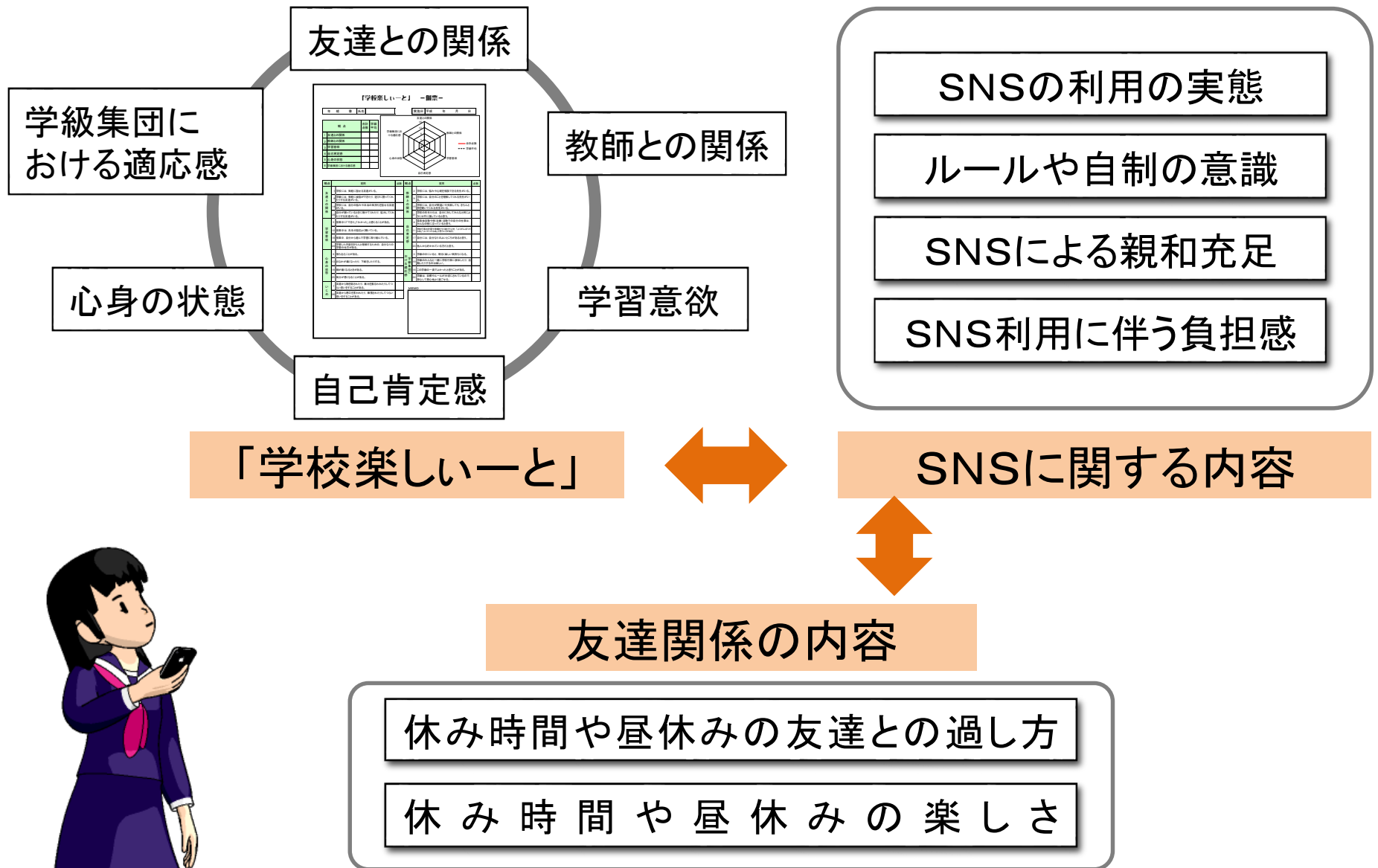
「学校楽しいーと」

SGE*などの活動

* SGE：構成的グループエンカウンター



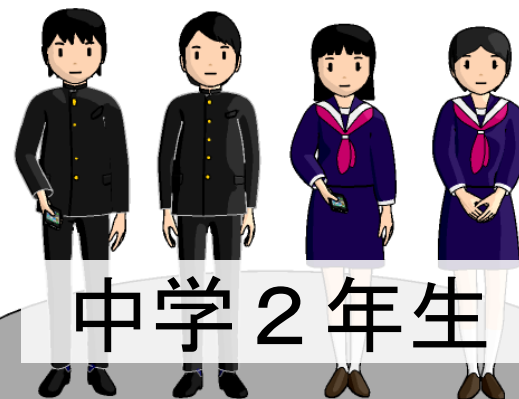
■ 児童生徒対象の調査（平成27年6～7月実施）



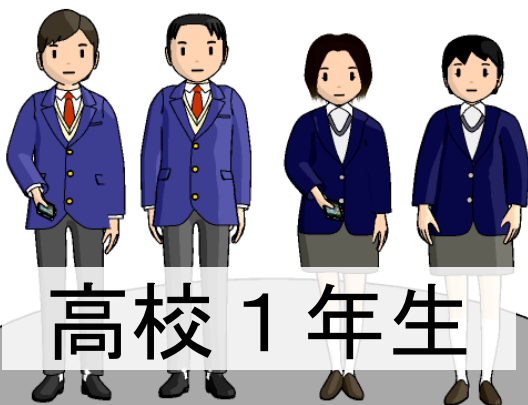
■ 児童生徒対象の調査（平成27年 6～7 月実施）



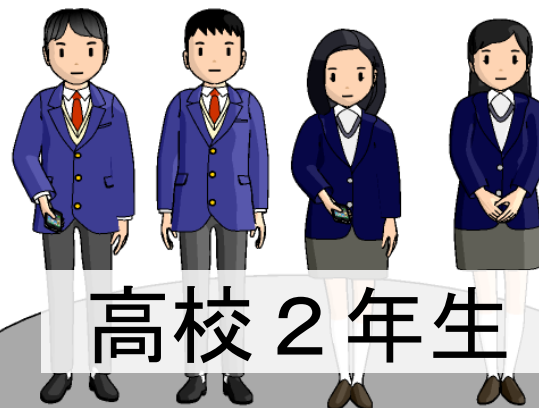
小学6年生



中学2年生



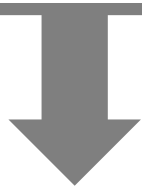
高校1年生



高校2年生

■ 研究協力員の実践の検証

質問紙による児童生徒の実態調査



教育相談課にて調査結果報告書を作成



「学校楽しいーと」などの活用



人間関係づくりなどの実践

実態調査に基づく，SNS利用の影響を踏
まえた人間関係づくりの具体的な方策を実践

4 教師対象の調査結果と分析

教師対象の実態調査結果

教師の調査



児童生徒の観察から捉えている意識

児童生徒に対する働き掛けの実態

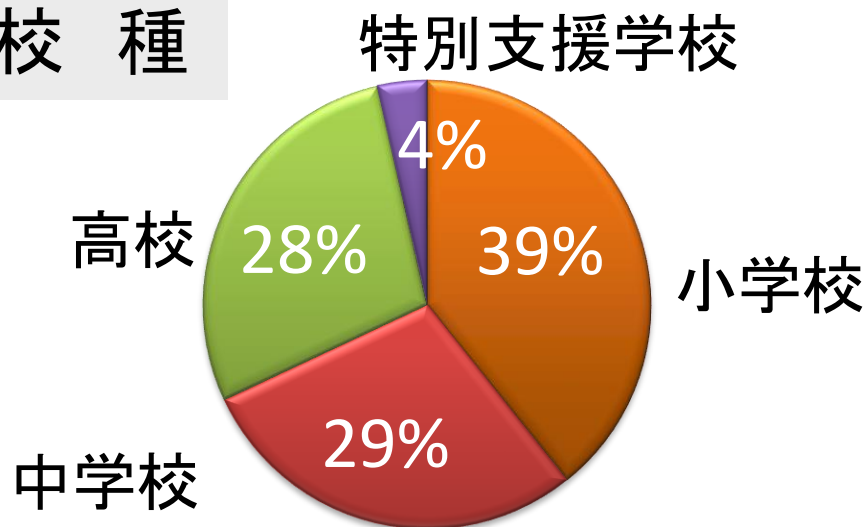
取組の状況

年間計画

「学校楽しいーと」

SGEなどの活動

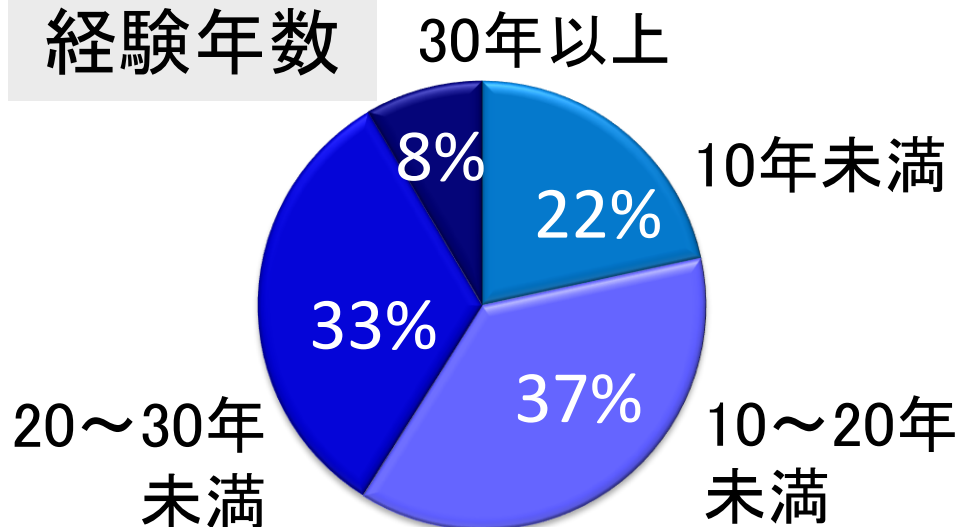
校 種



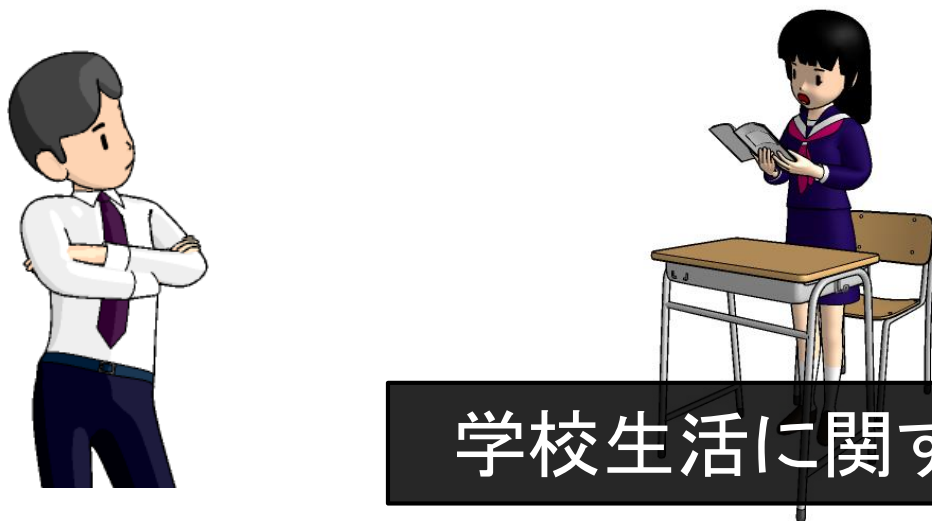
調査協力者数

・ 小学校	2	2	1	人
・ 中学校	1	6	2	人
・ 高 校	1	6	0	人
・ 特別支援学校	2	0		人
合計	5	6	3	人

経験年数



■ 教師対象の実態調査結果



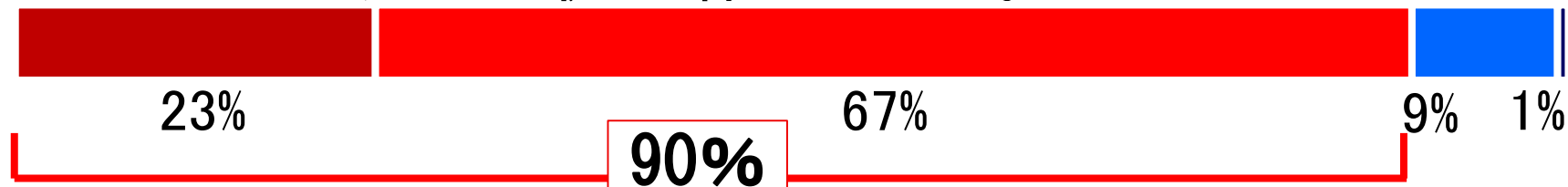
- とても思う
- 思う
- あまり思わない
- 思わない

学校生活に関する内容

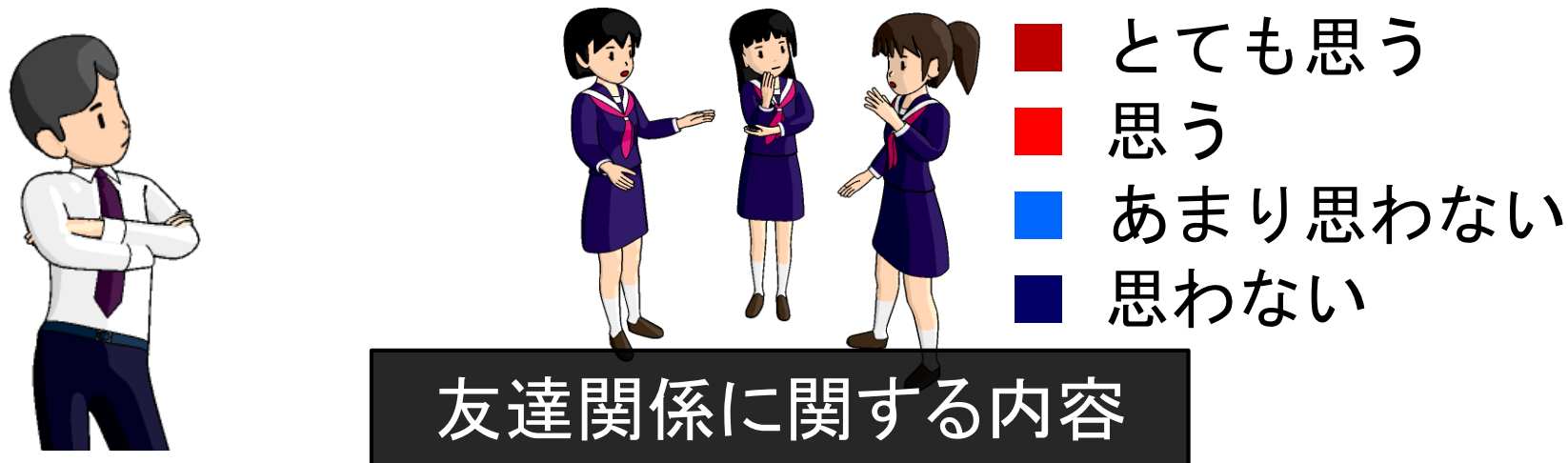
- 感情をコントロールできない児童生徒が増えている。



- 自分の思いや考えを伝えることを苦手にし、自己表現力が乏しい児童生徒が増えている。



教師対象の実態調査結果



- 良好な友達関係であっても本音を隠す児童生徒が増えている。



- 新たな友達との関係をつくることを苦手になっている児童生徒が増えている。



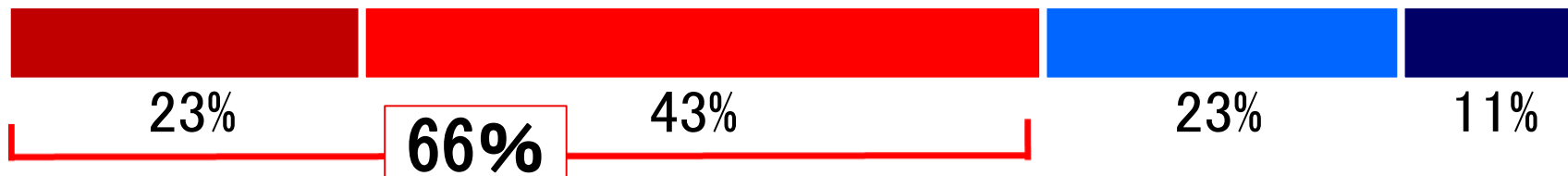
教師対象の実態調査結果



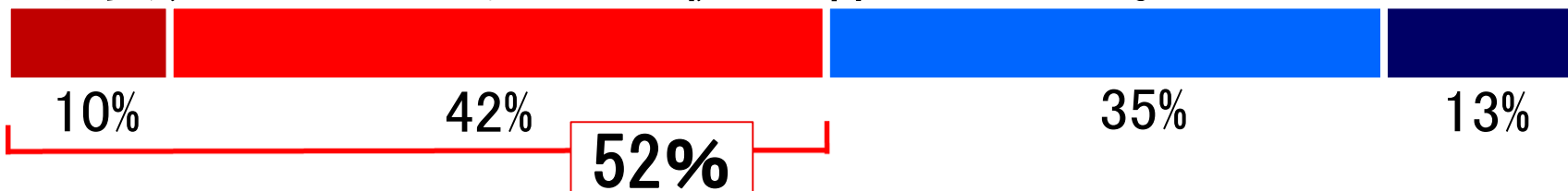
- とても思う
- 思う
- あまり思わない
- 思わない

SNS利用に関する内容

- LINEなどのSNSでのやり取りがきっかけで友達関係に悩むようになった児童生徒が増えている。



- LINEなどSNSの利用が原因で、精神的に不安定になった児童生徒が増えている。



■ 教師対象の実態調査結果



児童生徒に対する働き掛けの実態

取組の状況

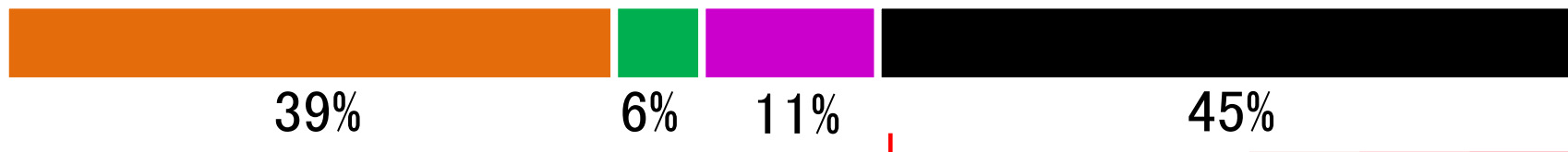
年間計画

「学校楽しいと」

SGEなどの活動

- 学校で年間計画を立てている
- 学年で年間計画を立てている
- 自分なりに年間計画を立てている
- 年間計画はない

- 児童生徒の友達関係づくりをねらいとする年間計画を立てている。



■ 教師対象の実態調査結果（考察）

以前の児童生徒と比べると…

- 感情のコントロールができない，自己表現力が乏しい。
- 新しい関係づくりを苦手にする，良好な関係でも本音を隠す。
- SNSのやり取りで友達関係に悩む，精神的に不安定になる。

■ 人間関係づくりの視点における指導・支援の重要性を理解しているが

計画的な実践はしていない状況



5 児童生徒対象の調査結果と分析

児童生徒対象の調査結果

児童生徒を対象とした実態調査の結果と分析

調査期間：平成27年 6～7 月 有効回答数2,307人

小学 6 年生



中学 2 年生



高校 1 年生

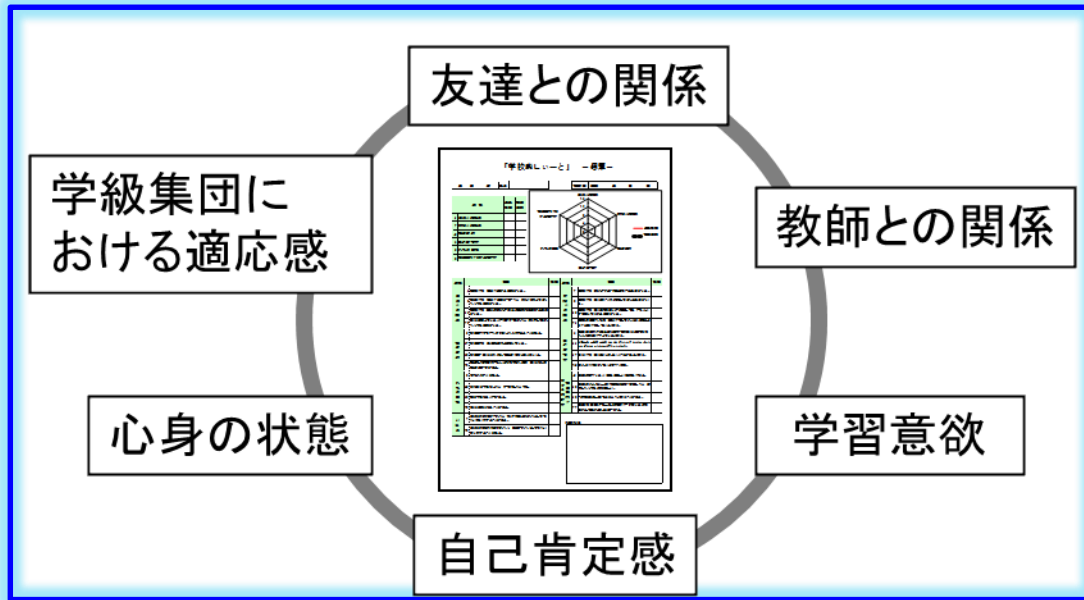


高校 2 年生



児童生徒対象の調査結果

- 利用するグループ
- 利用しないグループ



SNSの利用の実態

ルールや自製の意識

SNSによる親和充足

SNS利用に伴う負担感

「学校楽しいーと」

SNSに関する内容

友達関係の内容

休み時間や昼休みの友達との過ごし方

休み時間や昼休みの楽しさ



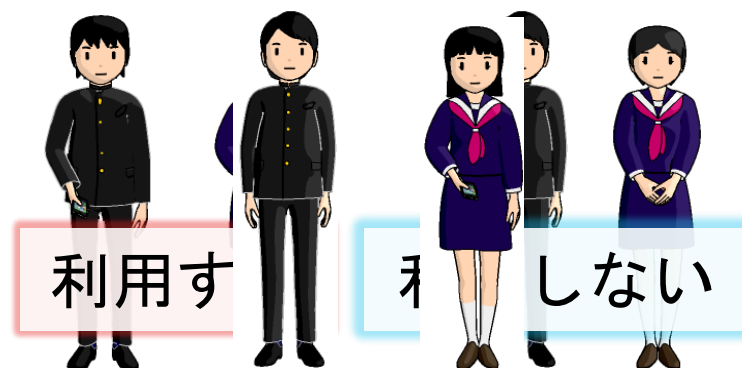
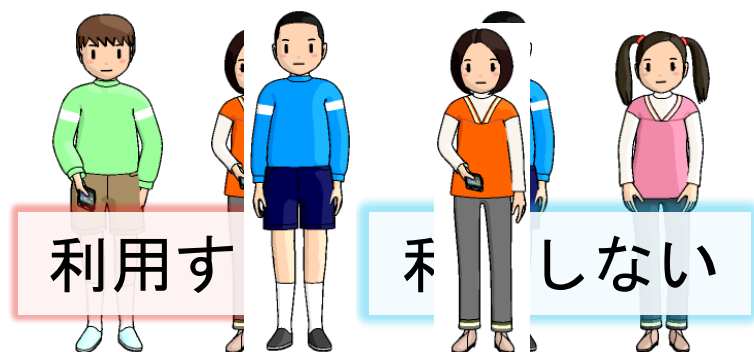
児童生徒対象の調査結果

児童生徒を対象とした実態調査の結果と分析

調査期間：平成27年6～7月

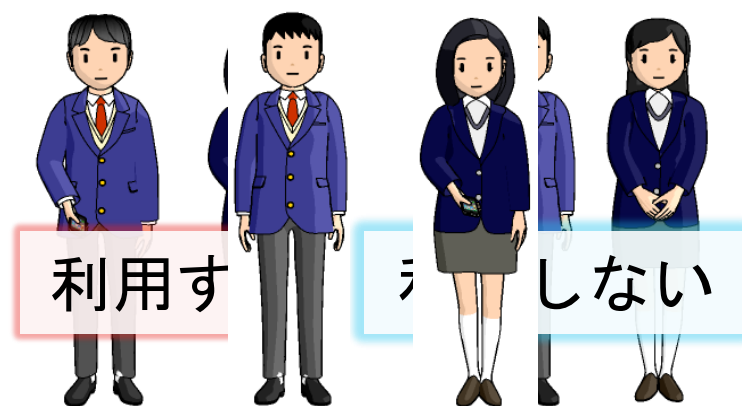
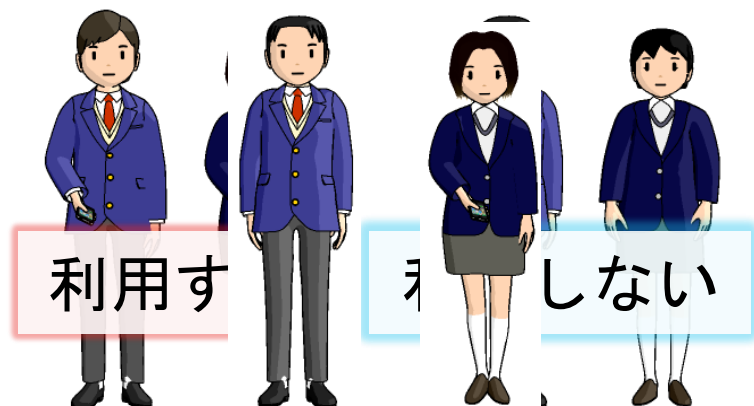
小学6年生

中学2年生



高校1年生

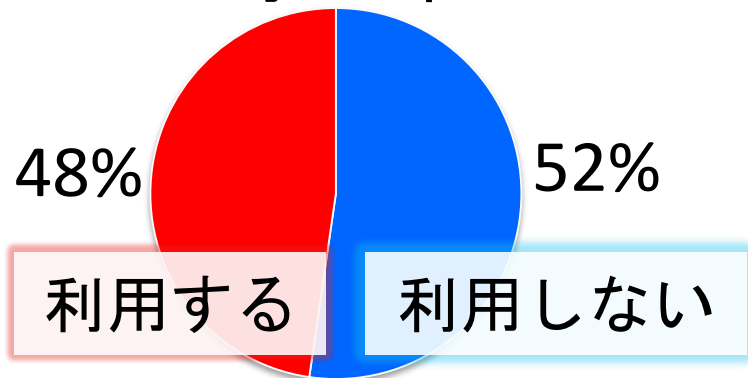
高校2年生



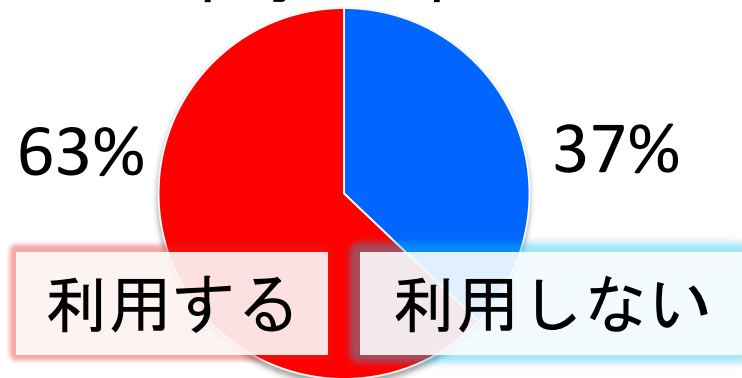
■ 児童生徒対象の調査結果

児童生徒を対象とした実態調査の結果と分析

小学 6 年生



中学 2 年生



高校 1 年生



高校 2 年生



S N S を利用する児童生徒と利用しない児童生徒

「学校楽しいーと」 - 個票 -

年 組 番 氏名	実施日 平成 年 月 日
----------	--------------

観 点	合計 点数	学級 平均
1 友達との関係		
2 教師との関係		
3 学習意欲		
4 自己肯定感		
5 心身の状態		
6 学級集団における適応感		

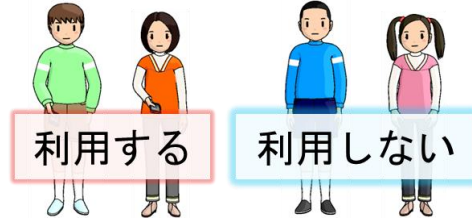
友達の関係
教師との関係
学習意欲
自己肯定感
心身の状態
学級集団における適応感

— 合計点数
--- 学級平均

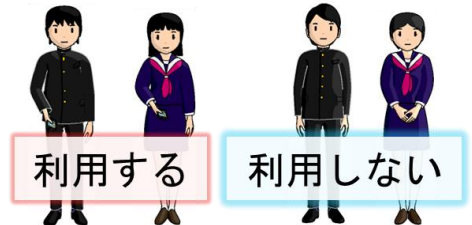
観点	質問	点数	観点	質問	点数
友達の関係	1 学校には、気軽に話せる友達がいる。		教師との関係	2 学校には、悩みや心配を相談できる先生がいる。	
	8 学級には、気軽に会話ができたり、遊びに誘ってくれたりする友達がいる。			9 学校には、自分のことを理解してくれる先生がいる。	
	14 学校には、自分の悩みや本当の気持ちを話せる友達がいる。			15 学校には、自分が間違えたり失敗しても、きちんと話を聞いてくれる先生がいる。	
	20 自分が困っているときに助けてくれたり、協力してくれたりする友達がいる。			21 学校の先生たちは、自分に対してみんなと同じように公平に接していると思う。	
学習意欲	5 授業中に「できた」「わかった」と感じることがある。		自己肯定感	4 委員会活動や係(当番)活動での自分の仕事は、みんなの役に立っていると思う。	
	12 授業中は、先生の話をよく聞いている。			11 学校行事の計画や準備をやり遂げたとき、「よくがんばったなあ」「よくやったなあ」と思うことがある。	
	18 授業中、自分から進んで学習に取り組んでいる。			17 自分には、自分なりのよいところがあると思う。	
	24 学習した内容をきちんと理解するための、自分なりの学習の仕方がある。			23 他人から好かれている方だと思う。	
心身の状態	6 落ち込むことがある。		学級集団における適応感	3 学級の中に入ると、明るく楽しい気持ちになる。	
	13 おなかが痛くなったり、下痢をしたりする。			10 学級のみんなと一緒に学校行事に参加したり、活動したりするのは楽しい。	
	19 頭が痛くなるときがある。			16 この学級の一員でよかったと思うことがある。	
	25 気分が悪くなることがある。			22 学級は、目標やルールが大切にされているので、安心して居心地よく過ごせる。	
いじめ	7 友達から物を隠されたり、暴力を振るわれたりしてつらい思いをすることがある。		MEMO		
	26 友達から悪口を言われたり、無視されたりしてつらい思いをすることがある。				

各観点の平均値比較

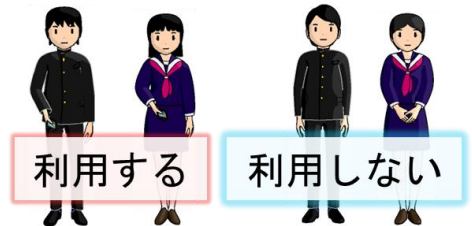
■ 小学6年生



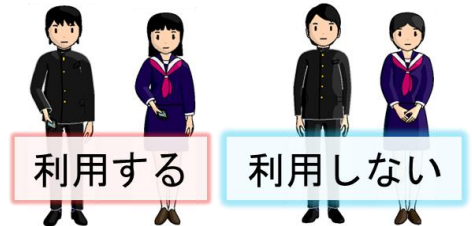
■ 中学2年生



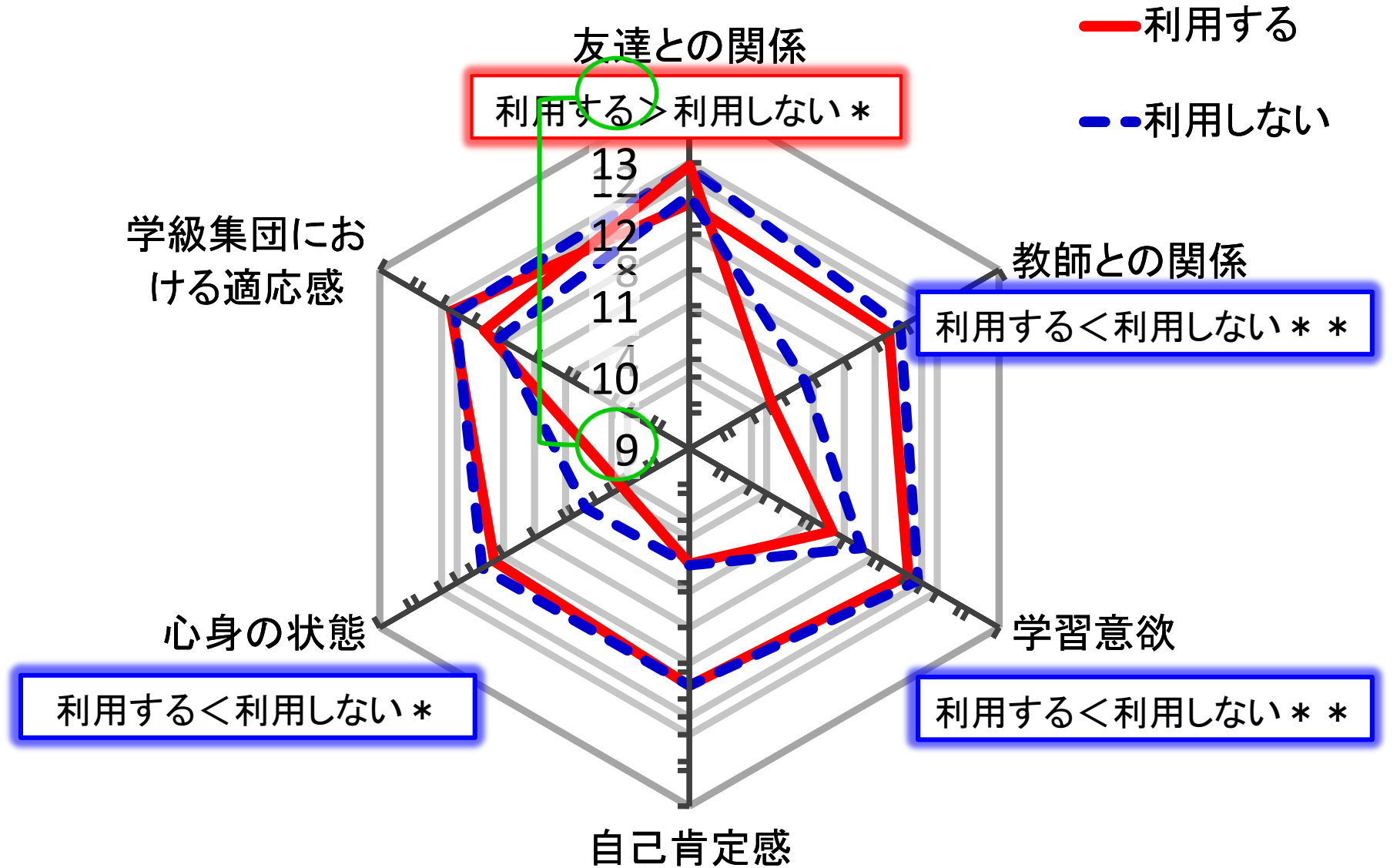
■ 高校1年生



■ 高校2年生

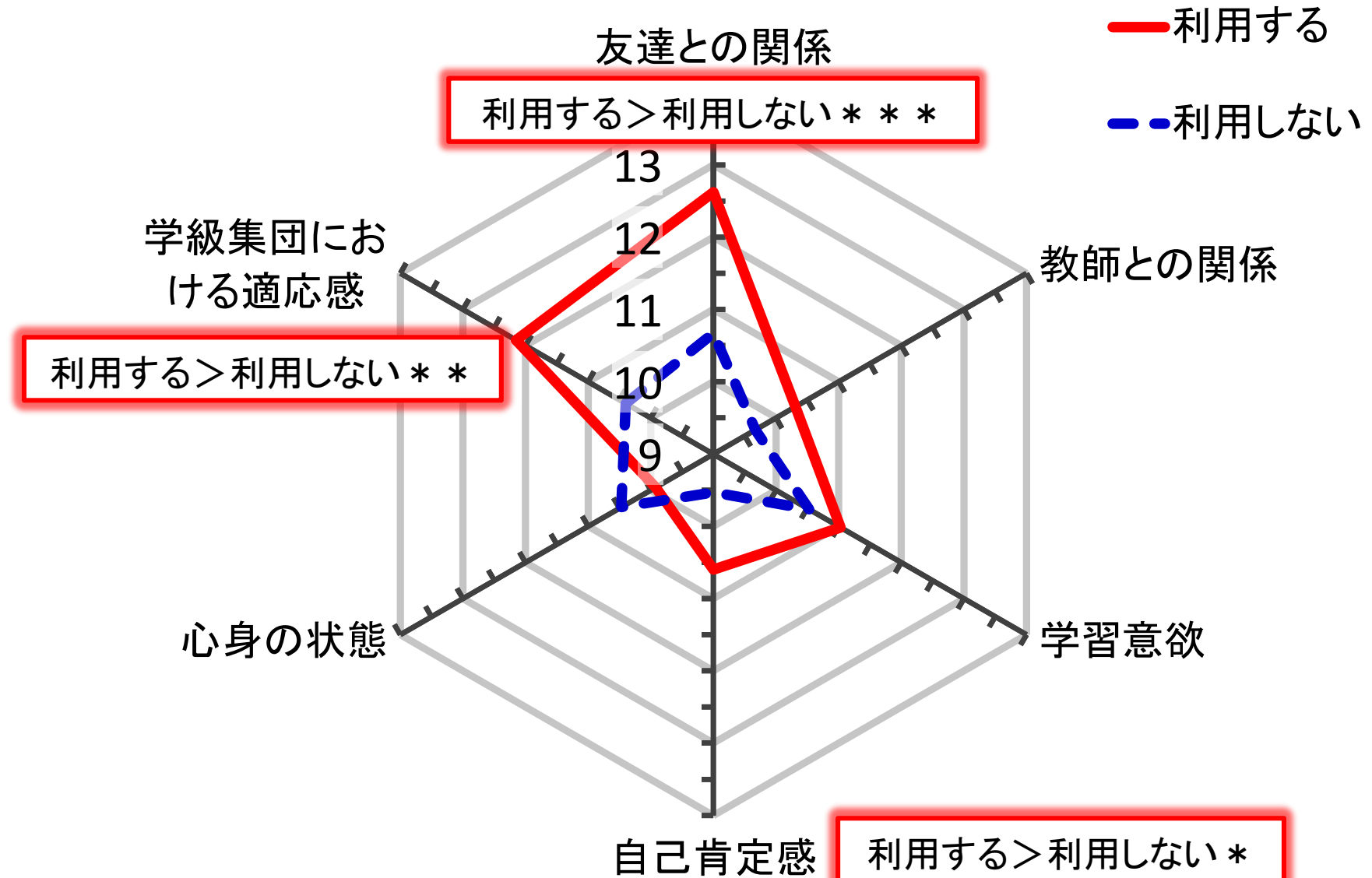


● 中学2年生 SNSを利用する生徒と利用しない生徒

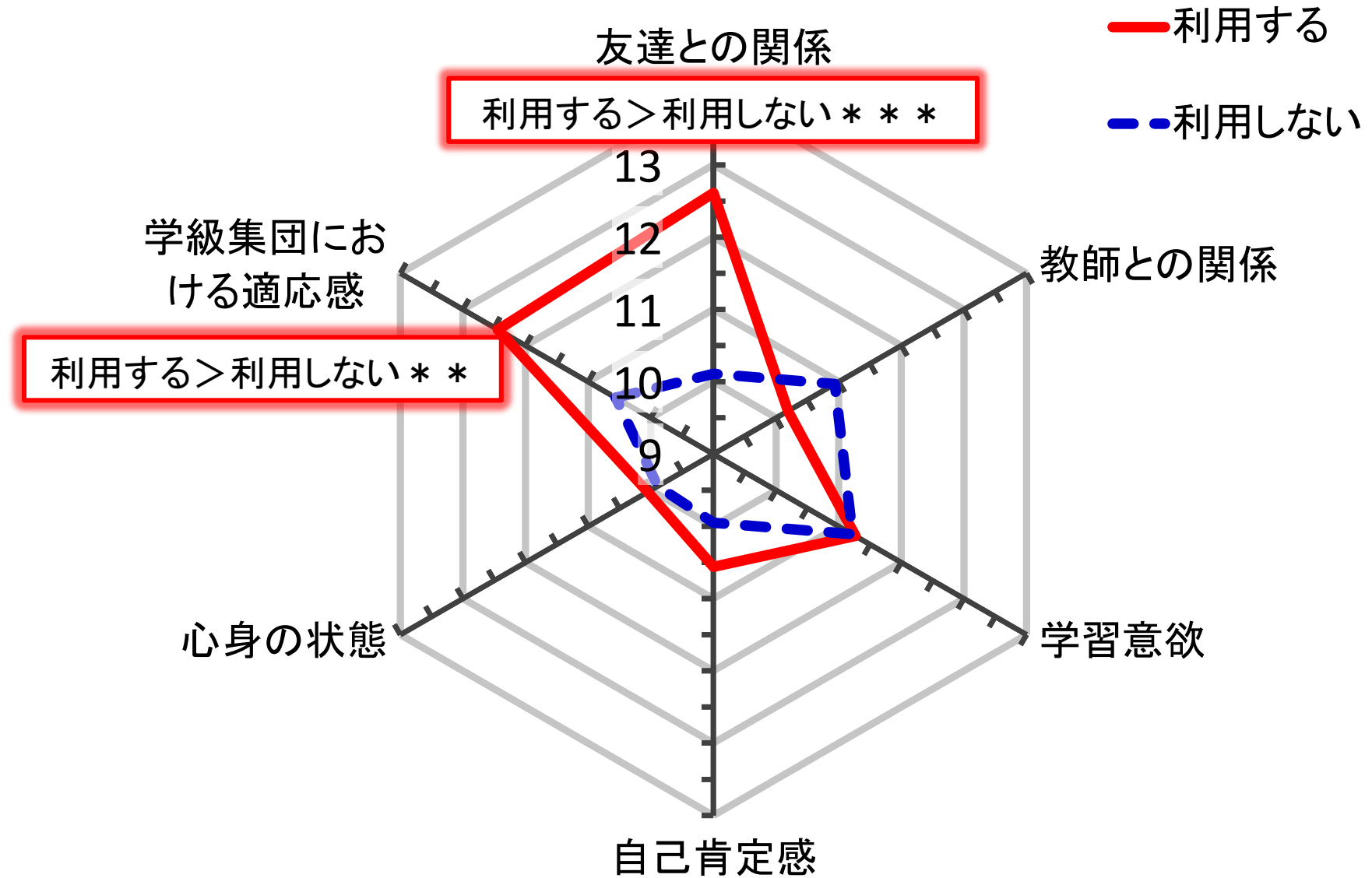


統計処理 T 検定 * 5%水準 ** 1%水準 *** 0.1%水準

● 高校1年生 SNSを利用する生徒と利用しない生徒



● 高校2年生 SNSを利用する生徒と利用しない生徒



統計処理 T 検定 * 5%水準 ** 1%水準 *** 0.1%水準

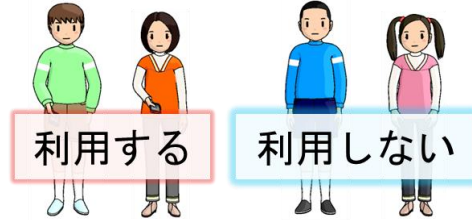
児童生徒と利用しない児童生徒

4 観点の下位項目

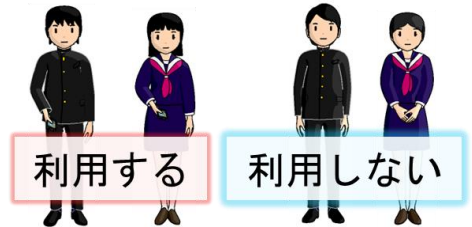
- ◆ 友達との関係
- ◆ 学級集団における適応感
- ◆ 心身の状態
- ◆ いじめ

下位項目の平均値比較

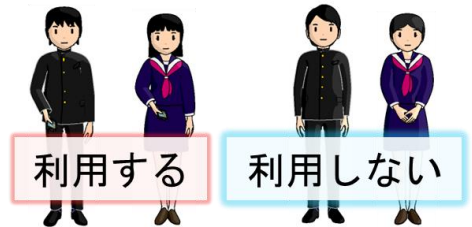
■ 小学 6 年生



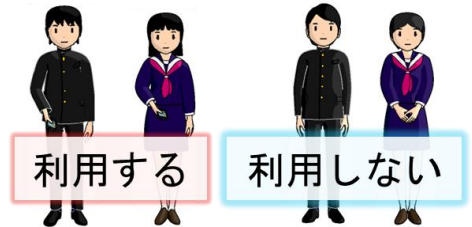
■ 中学 2 年生



■ 高校 1 年生

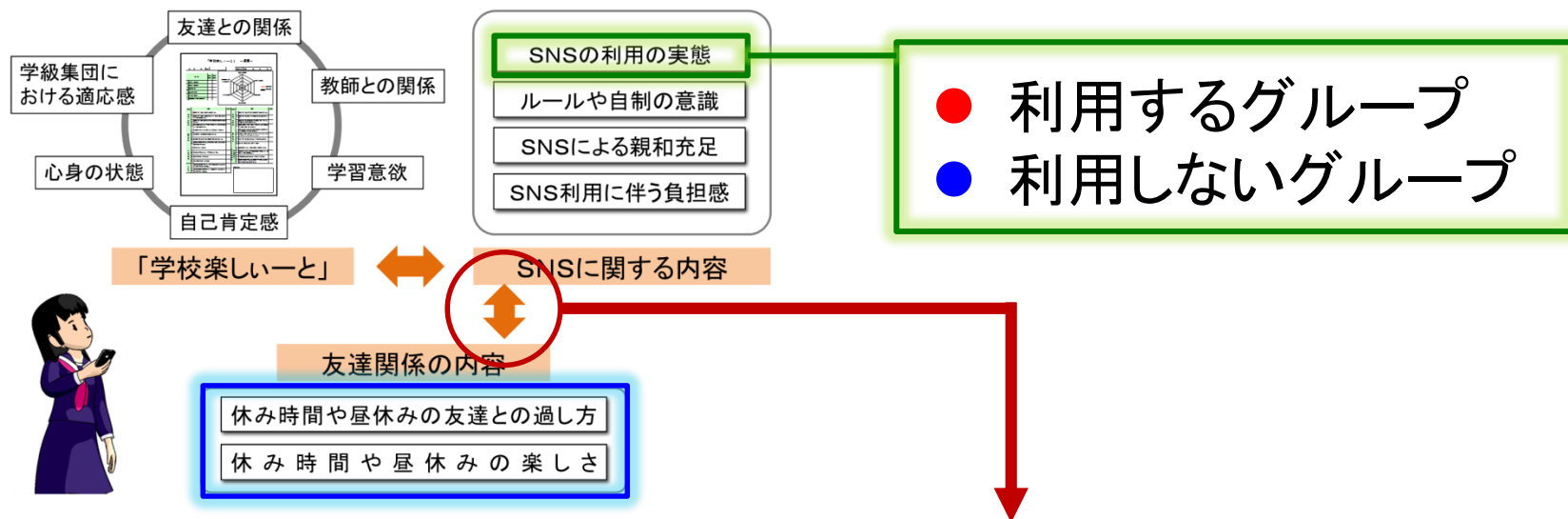


■ 高校 2 年生



観点	質問	点数	観点	質問	点数
友達との関係	1 学校には、気軽に話せる友達がいる。		教師との関係	2 学校には、悩みや心配を相談できる先生がいる。	
	8 学級には、気軽に会話ができたり、遊びに誘ってくれたりする友達がいる。			9 学校には、自分のことを理解してくれる先生がいる。	
	14 学校には、自分の悩みや本当の気持ちを話せる友達がいる。			15 学校には、自分が間違えたり失敗しても、きちんと話を聞いてくれる先生がいる。	
	20 自分が困っているときに助けてくれたり、協力してくれたりする友達がいる。			21 学校の先生たちは、自分に対してみんなと同じように公平に接していると思う。	
学習意欲	5 授業中に「できた」「わかった」と感じることがある。		自己肯定感	4 委員会活動や係(当番)活動での自分の仕事は、みんなの役に立っていると思う。	
	12 授業中は、先生の話をよく聞いている。			11 学校行事の計画や準備をやり遂げたとき、「よくがんばったなあ」「よくやったなあ」と思うことがある。	
	18 授業中、自分から進んで学習に取り組んでいる。			17 自分には、自分なりのよいところがあると思う。	
	24 学習した内容をきちんと理解するための、自分なりの学習の仕方がある。			23 他人から好かれている方だと思う。	
心身の状態	6 落ち込むことがある。		学級集団における適応感	3 学級の中に入ると、明るく楽しい気持ちになる。	
	13 おなかが痛くなったり、下痢をしたりする。			10 学級のみんなと一緒に学校行事に参加したり、活動したりするのは楽しい。	
	19 頭が痛くなるときがある。			16 この学級の一員でよかったと思うことがある。	
	25 気分が悪くなることがある。			22 学級は、目標やルールが大切にされているので、安心して居心地よく過ごせる。	
いじめ	7 友達から物を隠されたり、暴力を振るわれたりしてつらい思いをすることがある。		MEMO		
	26 友達から悪口を言われたり、無視されたりしてつらい思いをすることがある。				

SNSを利用する児童生徒と利用しない児童生徒



■ 全ての校種において、SNSを利用するグループが「休み時間・昼食時間は一緒に過ごしている」と多くが回答。

小学6年生

中学2年生

高校1年生

高校2年生

利用する*

利用する*

利用する*

利用する***

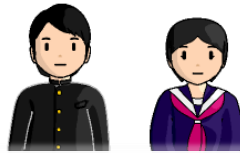
統計処理T検定 * 5%水準 ** 1%水準 *** 0.1%水準

「SNSを利用しない児童生徒」の考察



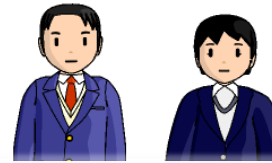
小学6年生

利用しない



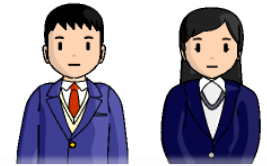
中学2年生

利用しない



高校1年生

利用しない



高校2年生

利用しない

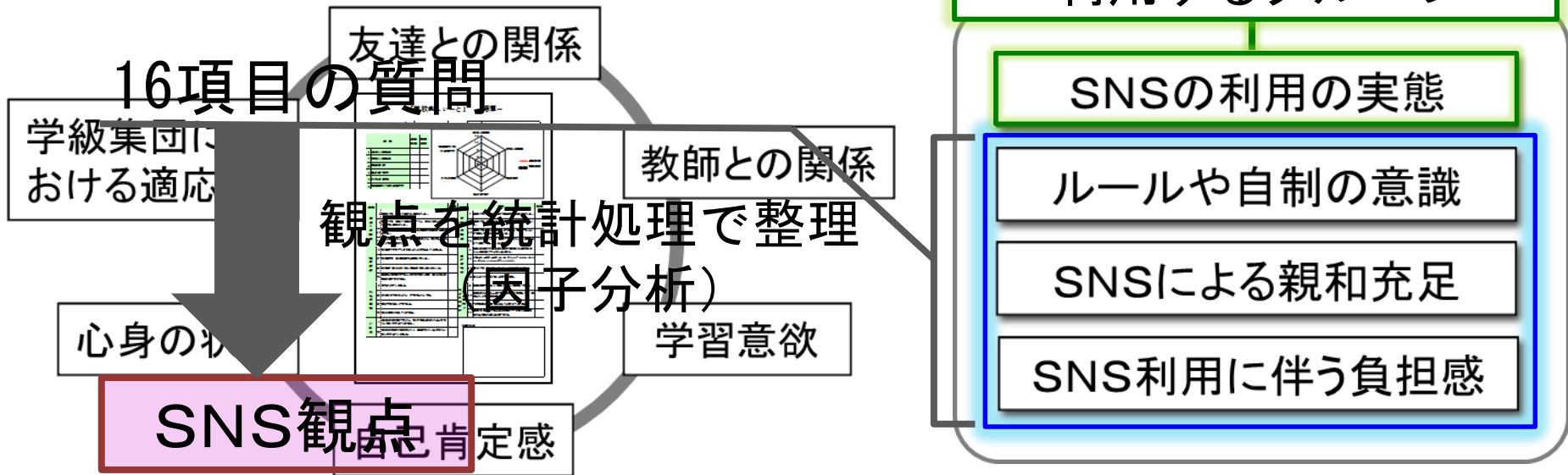
- 友達との関係の悩み
- 学級集団における適応感の低さ



- SNSを利用しない児童生徒は、学級集団に対して疎外感をもち、人間関係が希薄になりやすいため、学校（学級）適応感を高める指導・支援が特に必要。

● SNSを利用する児童生徒の傾向と特徴

■ 児童生徒対象の調査



「SNSをめぐるトラブル」への対処の意識
高校 ■ 「SNSをめぐるトラブル」への発生後の対処の意識
■ 「SNSをめぐるトラブル」への備えの意識

■ 「やりとりをする相手との関係性」の悩み・負担感

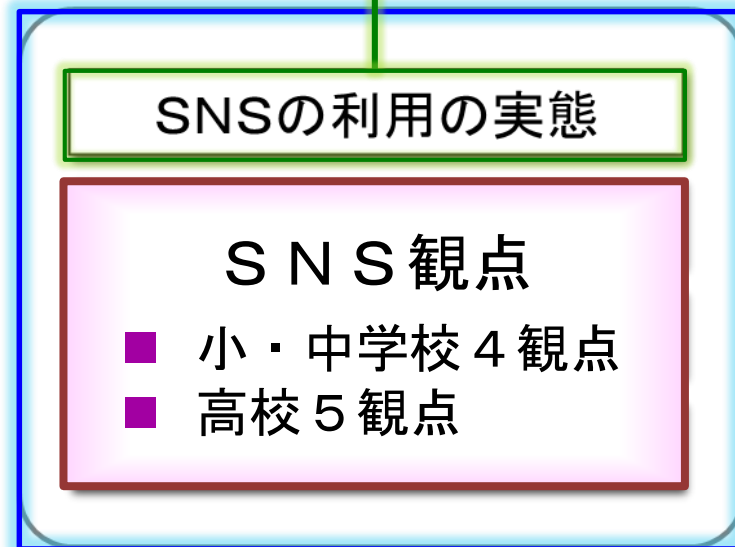
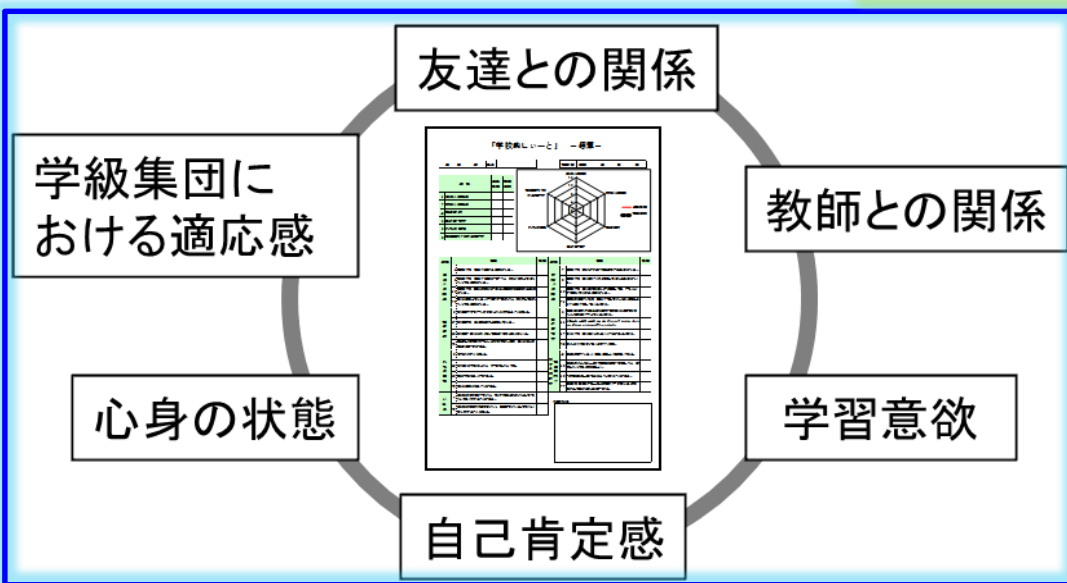
■ 「即レス」の悩み・負担感

■ 「SNS利用のやりとり」の親和性



SNSを利用する児童

- 利用するグループ
学年間の比較, 男女間の比較



「学校楽しいーと」



SNSに関する内容

T 検定, χ^2 検定, 相関分析



二要因分散分析

友達関係の内容

休み時間や昼休みの友達との過ごし方

休み時間や昼休みの楽しさ



● SNS を利用する学年間の傾向と特徴

小学 6 年生



利用する
男子



利用する
女子

中学 2 年生



利用する
男子



利用する
女子



高校 1 年生



利用する
男子



利用する
女子

高校 2 年生



利用する
男子



利用する
女子

● SNSを利用する学年間の傾向と特徴

■ 「やりとりをする相手との関係性」の悩み・負担感



■ 「即レス」の悩み・負担感



男子



女子



男子



女子



男子



女子



男子



女子

小学6年生

中学2年生

高校1年生

高校2年生

■ 「SNS利用のやりとり」の親和性 後の対応の意識



■ 「即レス」の悩み・負担感



● SNSを利用する男女間の傾向と特徴

小学6年生



利用する
男子



利用する
女子



中学2年生



利用する
男子



利用する
女子

高校1年生



利用する
男子



利用する
女子



高校2年生



利用する
男子



利用する
女子



● SNSを利用する男女間の傾向と特徴

SNSを利用する男子生徒



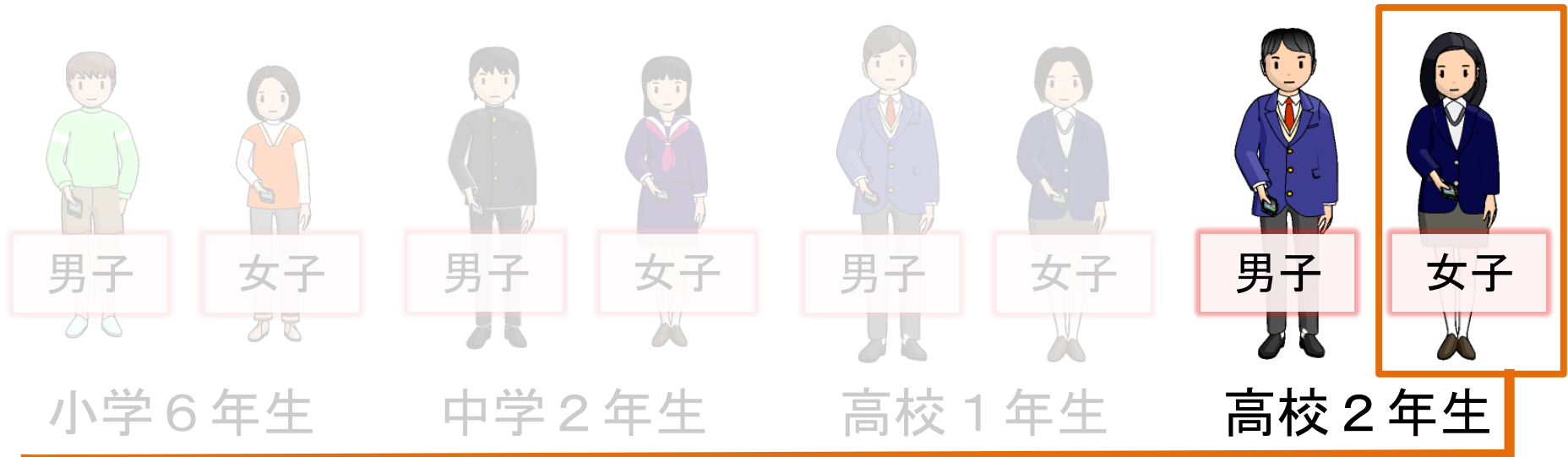
● 高校1年生の男子は女子よりも

○「個人情報を出さないようにしている。」と多くが回答。

●「メッセージがきたらすぐに返事をする。」
「友達から送られてくるメッセージをチェックする。」と多くが回答。

SNSを利用する男女間の傾向と特徴

SNSを利用する女子生徒



高校2年生の女子は男子よりも

- 「相手が不愉快な気持ちになるような内容は書かない。」
「困ったときは親や先生に相談する。」と多くが回答。
- 「メールやチャットでのやり取りの利用が原因で、疲れやストレスを感じている。」，「送信後、あの伝え方で良かったのだろうかと思う。」と多くが回答。

「SNSを利用する児童生徒」の考察



- 親しい関係の構築
- 学級の所属感の高まり
- SNSの利用の負担感
- 疲れやストレス

■ SNSを利用する児童生徒は、SNSの相手との関係やメッセージの応答に悩むようになりやすいことから、対面で自分の気持ちや思いを伝えるコミュニケーション力を高める指導・支援が特に必要。

7 「豊かな人間関係づくり」の モデルプランの作成

「豊かな人間関係づくり」のモデルプランの視点

自他の理解

- 新学期の始めに、他者との関わりの中で自己理解・他者理解を深め他者を思いやる「**自他の理解**」を育む視点



他者や集団への適応

S N S をしない児童生徒

- わけへだてなく互いの存在を理解して尊重し合ったりして、「**他者や集団への適応**」を育む視点



他者と交流する実践力

S N S をする児童生徒

- S N S 上の不快な感情を抱え込まずに、直接、対面で伝えたり相談したりできるようにし、また、S N S グループ以外とも関わりをもてるようにするなど「**他者と交流する実践力**」を育む視点

■ 研究協力員の実践の検証



「学校楽しいーと」などの活用



人間関係づくりなどの実践

「クラスでの友人関係に関する」質問紙で検証

6月下旬

11～12月

実践前

授業や学校行事など

実践後

- 実践前と実践後の結果を比較分析（ χ^2 検定など）
- 成果と課題の検証

■ モデルプランの成果の検証

「クラスでの友人関係に関する」質問紙

- 栃木県教育委員会の「望ましい人間関係を構築する能力を育成するための指導・支援の在り方」を参考にして作成
- 児童生徒が「できる」「できない」で回答（13項目）
- 1回目の調査と2回目の調査で変容を比較

「豊かな人間関係づくり」の視点

自他の理解

- 自己理解
- 他者理解
(共感性)

他者や集団への 適応

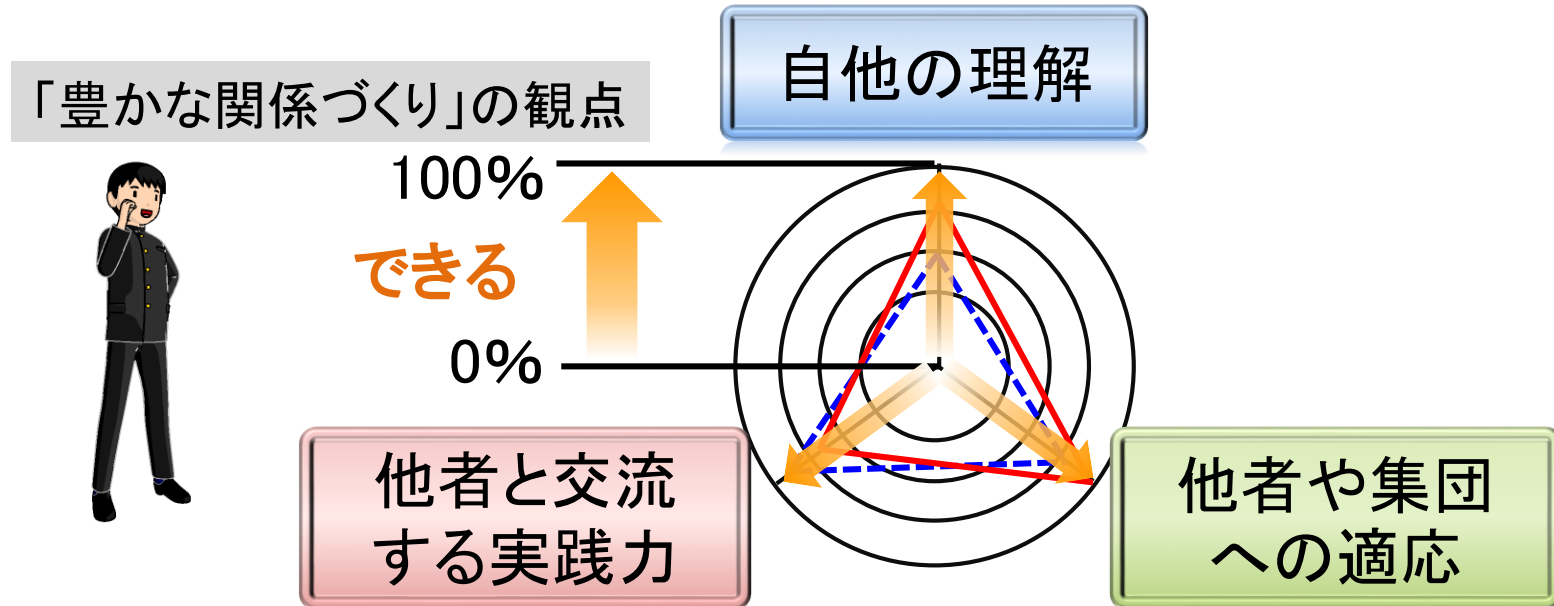
- 協調的行動
- 適応的行動

他者と交流する 実践力

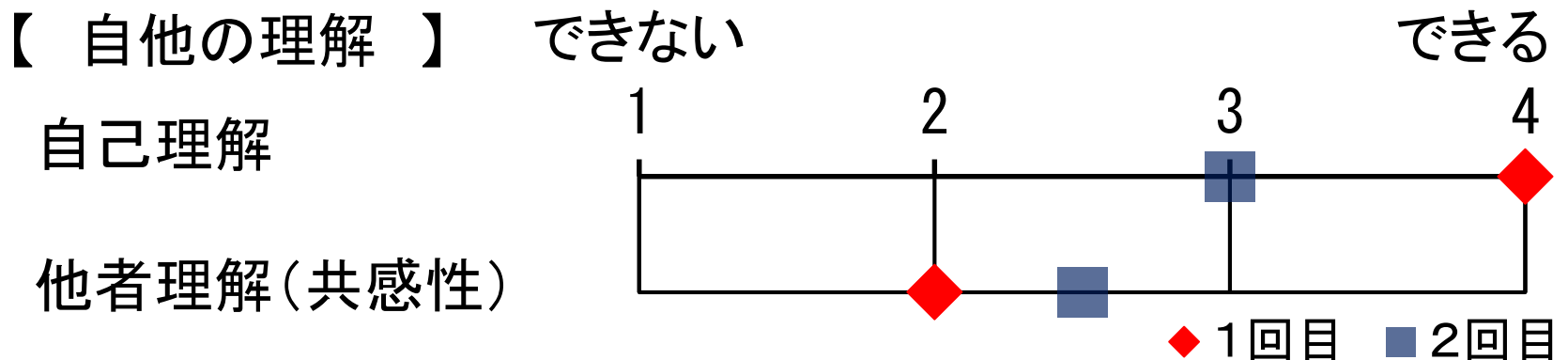
- 表現行動
- コミュニケーション能力
- 問題解決の場面

■ モデルプランの視点

■ 3観点はレーダチャートで可視化(学年・個人用)



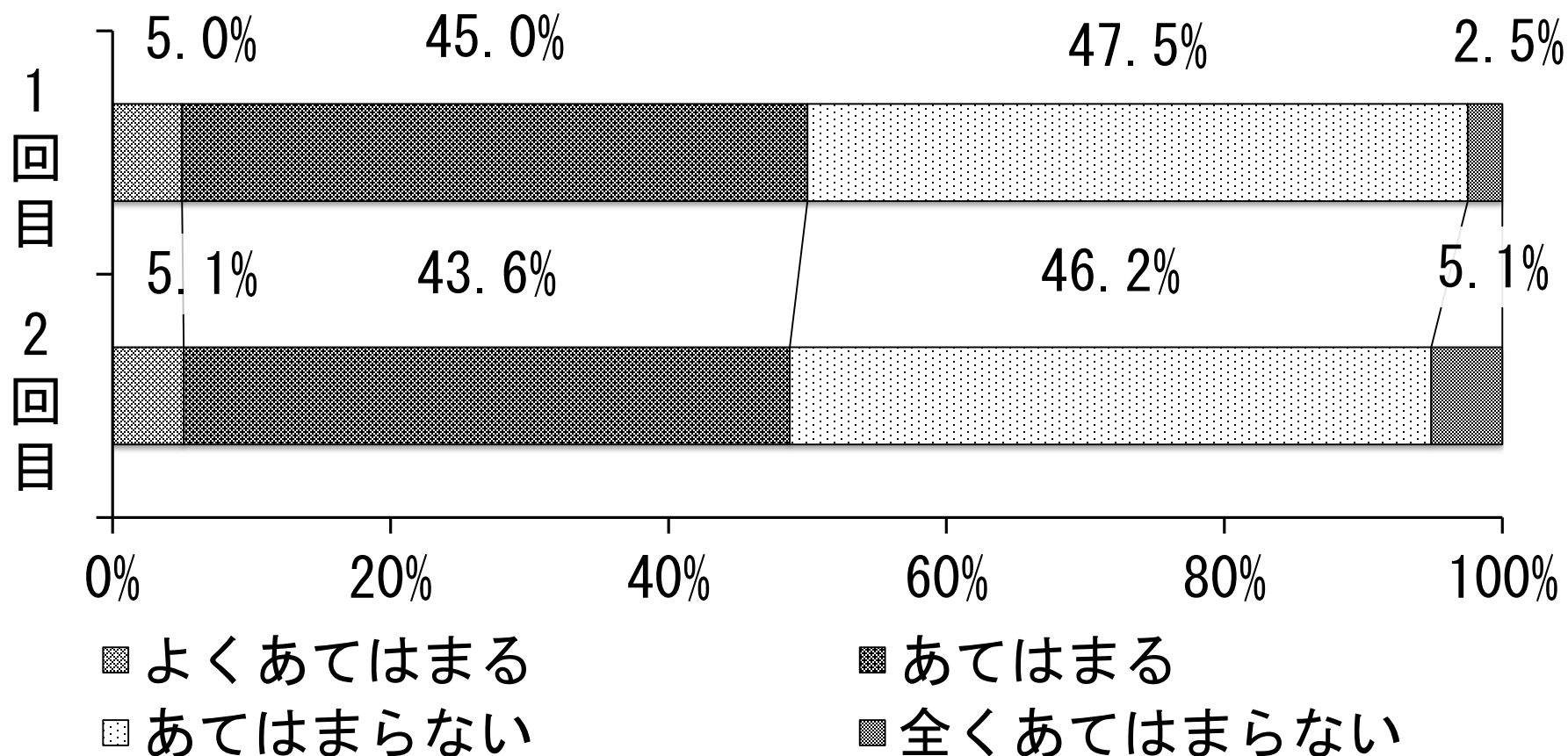
■ 下位の観点は点グラフで可視化(個人用)



■ モデルプランの視点

■ 下位の観点は帯グラフで可視化(学級用)

(5) 自分のよさに気づいている[「自他の理解」の質問項目]



8 今後の計画

■ 今後の計画

(1) 「豊かな人間関係づくり」のモデルプランの作成

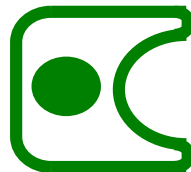
実態調査の結果と研究協力員の検証を総合的に整備し「豊かな人間関係づくり」をねらいとするモデルプランを提示する。

(2) SNS利用の影響を踏まえた人間関係づくりの具体的な方策の検討

研究協力員によるモデルプランによる実践の成果を検証し、指導・支援で効果のあったアプローチや機を捉えての集団や個別的な対応の在り方について方策を検討する。

第8分科会 教育相談課 調査研究発表

児童生徒の豊かな人間関係づくりに関する研究
ーSNSの利用による友人関係への影響に着目してー



鹿児島県総合教育センター
教育相談課

出水市立米ノ津小学校
教諭 横山 浩之

1 はじめに

本校は、鹿児島県北部、熊本県との県境となる出水市にあり、昨年、創立 140 周年をむかえた地域に根ざした学校である。出水平野には、冬になると大陸から鶴が飛来し、西には八代海、東には紫尾山と、自然豊かな環境に囲まれている。全校児童は 268 名、12 学級で、「自ら学び、基礎・基本を身に付け心豊かにたくましく生きぬく子どもを育成する。」を目標に教育活動に取り組んでいる。

本校には、通常学級 9 学級、特別支援学級 3 学級あり、特別支援教育にも力を入れている。特別支援学級では、知的障害児学級に 6 人、自閉症・情緒障害特別支援学級に 10 人在籍し、来年度は通常の学級在籍児童の中から更に入級する予定の児童がいる。通常の学級内においても、学習に対する取組や周囲とのコミュニケーションについても、課題を抱える子が見られる。そのため、生徒指導上の問題だけでなく、特別支援教育についても職員全体で理解を深め、対応に努めている。

2 本学級における生徒指導上の課題

6 年 A 組は、男子は活発で何にでも意欲的、積極的に取り組む姿が見られ、女子はおとなしく、落ち着きをもって行動できる学級である。しかし、その反面、男子が、落ち着きが見られず、周囲を考えた行動が取れないこともあり、4 月当初、男女間において様々な溝がある状態が見られた。例えば、男女で話をしないとか、男女ペアで活動することに抵抗があることが多く見られた。

また、児童の中には、自己表現が苦手な情緒が不安定になり、些細なことで周囲ともトラブルとなってしまう児童もいる。

3 調査対象学級の状況と SNS の利用の実態

(1) 学級における SNS の利用

	自分のもの	親のもの	兄弟姉妹のもの	家族みんなのもの	ほとんど使用しない
ネット接続機器の所持	7 人	5 人	0 人	3 人	13 人

	ほぼ毎日	ときどき（週 3～4）	あまり使わない（週 1～2）	ほとんど使わない
メールやチャットの利用	4 人	2 人	9 人	13 人

SNS の利用について、自分で機器を所有している児童は、4 人に 1 人の状態で、親の携帯などを使って利用をする児童を含めると、2 人に 1 人以上の実態になる。SNS を利用する児童の多くは、家族間でのやりとりや、少年団等での連絡用に使っている。友達同士でグループを組んでいる状況は、4 月の時点では 1 件だけだったが、半年以上経過した現在では、その後増えていることが予想される。また、機器の所有についても、兄や姉のものを譲り受けるなどして、自分のものを所有している児童が増えていることも考えられる。

(2) 「学校楽しいと」の学級の結果（平成 27 年 6 月実施）

調査対象学級の「学校楽しいと」の結果を表 1、図 1 に示す。

表 1 学級の「学校楽しいと」各観点の平均値

	学級	学年平均値
友達との関係	13.5	13.3
教師との関係	11.5	12.0
学習意欲	12.3	12.5
自己肯定感	10.8	11.2
心身の状態	10.8	11.7
学級集団における適応感	12.8	12.9

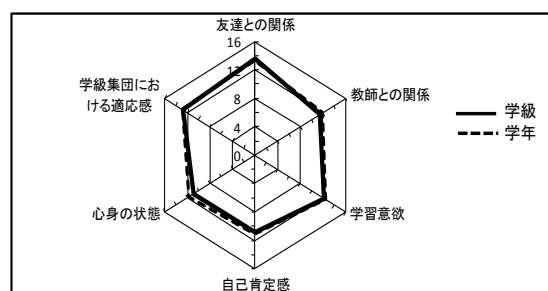


図 1 学級平均値レーダーチャート

表1, 図1より, 本学級は, 学年平均として比べるとやや低めであるが, 全体としては, バランスよく落ち着いていることが分かる。しかしながら, 「心身の状態」と「自己肯定感」の観点が, 10ポイント台で低いことが分かる。さらに個々に見ていくと, 「頭が痛くなることがよくある」, 「他人から好かれている方だとは全く思わない」など, 「1」のポイントを付けている児童も複数名おり, 心身の状態が良好ではなかったり, 自分のよさを認められないでいたりする状況がうかがえる。

(3) 第1回目「クラスでの友人関係に関する」調査結果(平成27年6月実施)

ア 学級の傾向と課題

第1回目の調査の結果, 否定的回答の度数分布が多かった質問内容の3項目を表2に示す。この結果から, 本学級の「豊かな人間関係づくり」における課題は「自己理解」, 「適応的行動」(協調的行動)の観点を高める取組であると捉えた。

表2 第1回目「クラスでの友人関係に関する」調査での質問項目(抜粋)

質問項目	度数分布(人)			
	4. よくあてはまる	3. あてはまる	2. あてはまらない	1. 全くあてはまらない
・ 自分のよさに気付いている【自己理解】	2	13	12	1
・ みんなで決めたことを守って活動することができる【協調的行動】	5	16	7	0
・ 友達とうまくいかなかったとき, 自分から友達との関係をよくすることができる【問題解決の場面】	2	14	12	0

4 学級に対する「豊かな人間関係づくり」の指導・支援と成果の検証

(1) 実践の内容

ア 児童に自信をもたせるための「キャリア教育」の実践

児童の中には, 自分自身に自信をもてず, 自己有用感(自分の属する集団の中で, 自分がどれだけ大切な存在であるかということ)を自分自身で認識することができない児童もいる。

そのため, まず, 自分の興味のある職業について調べ, その職業に就くためには, どんな勉強が必要なのか, どんな学校に進学すればよいのかを調べさせる。

次に, 10年後の自分(22歳)がどのような生活をしているのかを考えさせる。例えば, 大学や専門学校に進学するのであれば, そのためにどんな勉強をしないといけないのかを明確に考えねばならない。

また, 就職する場合でも, 他県, 他国にいるケースも考えられ, 家族と離れて自分で生活していくことを意識させるようにする。さらに, 20年後(32歳)については, 仕事に対してどんな立場でいるのかを考えさせ, 「結婚」についての考え方も含め, それまでの人生をどう歩むのかについて, 理解を深める機会をもつようにする。

ア 授業の実践(学級活動)

学習活動内容	子どもの動き
つか わ 1 「言葉あつめゲーム」に取り組む。 ○今回は「6年1組を表す言葉」 を, 1分間でたくさん集めるように にする。	15 分 1 ○グループで考えることで, 協力 して意見を言い合える雰囲気を作 る。 ○学級を表す言葉を考えることで, 自分たち自身に対するイメージ を具体的に考えられるようにす る。
み と お す 2 今日の活動について考える。 自分の長所について考えよう。	5 分 2 ○自分の良いところを認められて いない子が多く見られるので, 小さなことでも書けるようにし ていく。
し ら べ る 3 前回収り組んだ活動から, 今度は, 自分の良いところを見つける活動 に取り組むことを考える。 ○自分の短所について考える。 ○自分の短所を書き出して, その部 分も, 見方を変えれば長所にな ることを知る。	20 分 3 ○書いた短所を長所で見ること で, 長所を書きやすくする。 ○短所を長所の言葉に変える際に, 言葉が出てくるように, グル ープでお互いにアドバイスでき るようにする。
ふ か め る ま と め 4 友達の長所をお互いに書く。 ○机の上に置かれたプリントに, 相 手の長所を書き込んでいく。 5 自分の長所を書かれたプリントを 読み, 感想を書く。 ○友達に書いてもらった自分の長所 に関して, 見方の注意をする。 6 これからの学級や, これからの友 達とのつきあい方について話しをし てまとめる。	5 分 4 ○どの友達の良いところでも書け るように, 時間を決めて, 席を 移動して書けるようにする。 5 ○自分が短所だと思っていたこと も人から見れば長所になること を知る。 6 ○自分たちの

イ 児童のよさを認め合う「学級活動」の実践

1学期、自分のよさをすぐに挙げられる児童はいなかった。「自分の短所を、見方を変えることで長所になる体験活動（リフレーミング）」を実施し、自己理解を深める実践をした。

自分のよい所はなかなか言い出せない児童もいるため、まずは、グループ内で、お互いの長所を書き合う活動を行った。次に、グループごと移動したり、自由に移動したりして、より多くの友達の長所を書き合うようにした。互いの長所を書き終わった後、ほとんどの児童は、自分の長所がたくさん書かれていることを喜んで受け止めていた。

しかし、長所に同じ言葉が並んでいる場合や、自分にとって意外な面の長所などが書かれていることもあるため、「長所をどのように考えていったらよいか」という長所の見方（例：一つの言葉の中には、いろいろな意味の「よさ」がある、自分では気付かないよさもある）ことなどについての共通理解を図った。

ウ コミュニケーションを図るための「道徳」の実践

「だれに対しても思いやりの心をもち、相手の立場に立って親切にする」ためにも、児童の適切なコミュニケーションを図ることが必要である。授業では、児童にとって、イメージがもちやすいと思われる「ドラえもん」の中のキャラクターである「のび太」、「ジャイアン」、「しずかちゃん」の3人を取り上げた。その3人のやりとりを場面ごとにロールプレイすることを通して、その声掛けの仕方によって、相手への伝わり方が大きく違うことを理解させる。表現方法の違いについては、児童もよく理解しているからこそ、自分とは別なキャラクターを模することで素直に日頃の自分の言葉遣いと比較することができる。さらに、言われた側にも立って考えさせた。あわせて、冷静に対応できる方法やストレスをためない方法についても考えさせた。

イ 授業の実践（学級活動）

学習活動内容		子ども達の動き
つかむ	1 グループの中でトークゲームに取り組む。 ○すぐろくで、自分が話をする内容について決め、30秒間話しをする。	1 ○お互いに、良いところを考えられる話ができるようにする。 ○聞く側は、相手を肯定するように聞くようにする。
みとめ	2 今日の活動について考える。 10年後の自分について考える。 ○自分のなりた職業について考えたことを振り返る。 ○4年生での立派な時の目標を振り返る。	2 10年後の自分の生活について、想像することで、より身近に感じられるようにする。
しらべる	3 自分の10年後について考え、プリントにメモしていく。 ○仕事は？ ○家は？ ○家族は？ ○趣味は？	3 10年後の自分について、さらに細かく考えることで、漠然と「夢」だったことから、現実的な「目標」として捉えられるようにする。
ふかめる	4 自分の10年後について確認をして、それまでの進捗についても考える。	4 自分の進みたい学校などを考えられるようにする。
まとめ	5 10年後の自分について、今後発表することを確認し、自分でさらに考えておけるようにする。	5 次の活動を確認し、発表にうながられるようにする。

ウ 授業の実践（道徳）

学習活動内容		子ども達の動き
つかむ	1 じゃんけんゲームを行う。 ○隣同士でじゃんけんをして、どちらかが3回勝ったら座る。 ○あいこじゃんけんをして、3回あいこが出たら座る。	1 ○絶対に、結果に対して思ったことを話さないようにする。 ○勝ったとき、負けたときに思ったことをプリントに書く。 ○あいこにならなかったときに思ったことをプリントに書く。
みとめ	2 今日の活動について考える。 気持ちの伝え方を考える。	2 ○勝ったときや負けたとき、あいこにならなかったときに、どんな言葉を書いたのかを全体で確認する。
しらべる	3 自分が書いた言葉を発表し合う。 ドラえもんに出てくる「のび太・ジャイアン・しずかちゃん」について考えてみる。 ・キャラクターの違いで、どんな言葉の違いがあるかを考える。	3 ○のび太・ジャイアン・しずかちゃんがどんなキャラクターなのかを考えることで、言葉遣いの違いを考えさせる。 ・のび太・・・弱気、ストレス ・ジャイアン・・・強気、嫌な言い方 ・しずかちゃん・・・優しい、協調的
ふかめる	4 もう一度じゃんけんゲームをして、それぞれのキャラクターになって、相手に気持ちを伝える。	4 ○のび太・ジャイアン・しずかちゃんになって話すことで、客観的に表現の仕方や、言われた気持ちについて考えられるようにする。
まとめ	5 日頃の自分について考える。 ○日頃、自分が使っている言葉遣いについて考える。 ○自分が言われたときに、どう対応すればいいかを考える。	5 ○嫌な表現をする側ではなく、言われた側の気持ちを考え、どう対応すればいいかを考える。
まとめ	6 学習を振り返り、感想をまとめる。	6

(2) 第2回目「クラスでの友人関係に関する調査」の結果（平成27年12月実施）

第2回目の調査の結果、否定的回答の度数分布が多かった質問内容の3項目は表4に示す結果となった。「他者や集団への適用」の項目については、4項目中3項目が向上しており、学級の課題である協調性が高まっていることが分かった。「他者と交流する実践力」の項目については5項目中2項目、「自他の理解」については、ほぼ変化がなかったことから、自己肯定感をもち、自己表現ができるように更なる指導・支援が必要であることが分かった。

表4 第1回目「クラスでの友人関係に関する調査」での質問項目（抜粋）

質 問 項 目	度数分布（人）			
	4. よくあてはまる	3. あてはまる	2. あてはまらない	1. 全くあてはまらない
・ 自分のよさに気付いている【自己理解】	1 ↓	15 ↑	11 ↓	1 —
・ みんなで決めたことを守って活動することができる【協調的行動】	3 ↓	21 ↑	3 ↓	0 —
・ 友達とうまくいかなかったとき、自分から友達との関係をよくすることができる【問題解決の場面】	5 ↑	14 —	7 ↓	1 ↑

6 研究成果と今後の課題

(1) 研究成果

ア 自他の理解を深める取組を実践したことで、自己肯定感が低かった児童にとって、周りの友達が自分のよい点を認めていることを知ることになり、大きな自信をもつことになった。また、自分に過度の自信をもっていた児童にとっても、周りの友達からの評価を聞くことで、自分の思いとの違いを知るよい機会となった。

イ 他者や集団への適応を高める取組を実践したことで、落ち着いた学習態度、集団での活動態度を身に付けられ、集団全体がお互いに理解し合える関係を築くことができつつある。

ウ SNSの影響による友人関係を考慮した人間関係づくりを実践したことで、SNSでの人との繋がりが、時に友人関係の固定化、差別化につながる危険性があることを理解し、学校では、より多くの友達と実際に会って話をしたり、活動したりすることが有効であることに気付きつつある。

(2) 今後の課題

ア 自分に対する自信は、すぐに身に付くものではないので、継続して取り組んでいく必要がある。

イ 「他者と交流する実践力を高める取組」の実践を行ってきたが、他者に対して自己を表現するためには、自己肯定感が高まっていないとできないことでもあり、表現技術の習得と併せて、今後も継続して取り組んでいく必要がある。

中学校における豊かな人間関係づくりに関する生徒指導の実践

霧島市立舞鶴中学校
教諭 徳永 充朗

1 はじめに

本校は霧島市国分の中心地に位置し、平成15年度開校、本年度開校13年目を迎える歴史的には新しい学校である。

学級数は23学級（1年6学級、2年6学級、3年7学級、特別支援4学級）からなる大規模校で、4小学校区から生徒が入学し（H25年度までは5小学校区）、現在生徒数は721人である。

学校行事も盛んで、合唱コンクール、体育大会、舞中祭、駅伝大会などは学級・学年が一つにまとまる行事として生徒・教師ともに自然と熱が入り、学校全体の活性化の原動力となっている。

また、部活動も活気があり、特に男女ハンドボール部は開校以来、県内でもトップクラスにあり、全国・九州大会にも出場している。また文化系の部活動も盛んで、吹奏楽部や科学部もロボコン九州大会に出場するなど、お互いに刺激し合いながら切磋琢磨している。

2 本校における生徒指導上の課題

本校は4～5小学校区から成っているため、入学当初は友達ができるのか不安を抱えている生徒も多い。しかし、その不安も日々の授業や学校行事、部活動などを通して徐々に解消され、学級や部活動での友人関係を築きながら、学年を超えた先輩・後輩の良好な関係ができつつある。

また、毎年クラス編成を行っており、クラス集団の中でリーダー性を発揮する生徒を育成しながら、クラスや学年の集団として質を高め合えるようにしている。

ただ、大規模校であるがゆえに、3年間一度も話をする事のない生徒同士もあり、小規模の小学校から来る生徒には、慣れない環境（学校・学級・教師など）に戸惑い、なかなか自分のよさを出せないまま過ごしている生徒もいる。さらに、友達からの視線を気にしすぎてしまい、登校渋りや不登校に陥ってしまう生徒も見られる。

加えて、近年は情報端末の発達やアプリケーションソフトの開発に伴い、友人関係のトラブルが増加してきた。友人同士の悪口等が原因で友人関係を維持できなくなったり、仲間はずれにされたりするなどして、けんかに発展するケースもあった。また、直接自分の考えや思いを伝えずに文字によるコミュニケーションに頼ってしまうために、互いに誤解を生むケースも見られた。

このような状況から、本校では、自分の思いや考えを素直に表現して伝えること、そのための方法・手段を学ぶことで、前述のようなトラブルも解消されていくのではないかと考える。

3 調査対象学級の状況とSNSの利用の実態

(1) 1年生の状況

ア 調査学級の状況

本校は規模の異なる小学校から入学するため、新1年生の人間関係づくりが課題である。

男子142人、女子83人の計225人、男女比が6:4という構成であり、全体的に素直で学習面、運動面、学校行事等に意欲的、積極的に取り組む姿勢が見られ、男子生徒が多いためか、非常に活気のある学年である。その一方で友人関係においてトラブルもあり、登校渋りを訴える生徒もいる。

調査対象の学級は、全体的に明るく活気があり1年生らしい清々しさを感じるクラスである。友人関係も良好だが、思慮を欠く言動も見られるなど指導を継続して行っている部分もある。

イ 「学校楽しいーと」の結果(平成27年6月実施)

表1 学級の「学校楽しいーと」各観点の平均値

観 点	学級	学年平均値
友達との関係	13.1	13.2
教師との関係	11.4	11.7
学習意欲	12.0	12.3
自己肯定感	11.3	11.5
心身の状態	10.4	10.1
学級集団における適応感	12.3	12.6

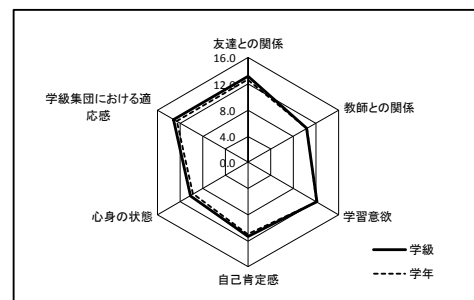


図1 学級平均値レーダーチャート

6月実施の「学校楽しいと」の学級の結果は表1、図1に示す結果であった。

全体的に学年平均値より低い値を示す項目が多かったことが分かる。気になる点として、「友達との関係」は比較的良好のようだが、「自己肯定感」が低いため学級集団の中での自己の存在感や達成感をもてずに「学級集団における適応感」を感じられず、さらに「心身の状態」にも影響を及ぼしているのではないかと考える。

ウ 第1回目「クラスでの友人関係に関する」調査の結果（平成27年6月実施）

表2 第1回目「クラスでの友人関係に関する」調査結果の特徴的な質問項目

質 問 項 目	度数分布（人）			
	4. よくあてはまる	3. あてはまる	2. あてはまらない	1. 全くあてはまらない
・ 自分のよさに気付いている【自己理解】	2	20	11	3
・ 自分の性格について分かっている【自己理解】	13	20	3	0
・ 友達のよいところを知っている【他者理解】	19	15	2	0
・ 友達を区別することなくあいさつを交わすことができる【表現行動】	13	17	5	1

表2の結果から、「自分のよさ」に約3割の生徒が気付いていないと回答している。しかし、「自分の性格について」は「ほとんどの生徒が分かっている」と回答しており、自己理解に関して自分の性格を理解しながらも、自分のよさに自信をもてないと思っている生徒が多いということが考えられる。

また、他者理解においては「友達のよいところを知っている」に表れているように、他者のよさや考えを相手の立場で考えるという共感的な部分はもち合わせていることが分かる。

以上のことから、親しい友達への理解は深く、自分自身のよさよりも友達のよさにとらわれがちになり、自分のよさを認識する場面が少なく、自己肯定感が低くなる傾向にあるのではないかと考える。

エ SNSの利用の実態

メールやチャットの利用状況	ほぼ毎日使う	ときどき（週3～4）	あまり使わない（週1～2）	ほとんど使わない
	37.2 %	27.9 %	11.6 %	23.3 %
メールやチャットが利用できなくなると困る	とても困る	少し困る	あまり困らない	全く困らない
	15.9 %	22.7 %	34.1 %	27.3 %
やりとりをしている友達と親しくなった	とても思う	思う	あまり思わない	全く思わない
	18.6 %	41.9 %	27.9 %	11.6 %

「メールやチャットの利用状況」で「ほぼ毎日使う」、「ときどき」と回答した約65%は本校1年生のメールやチャット利用において自分専用の接続機器を持っている割合と同じである。つまり、自分専用の接続機器を所有している生徒ほど利用頻度が高いことが分かる。

さらに、「利用できなくなると困る」において「困る」と回答している約37%は、「ほぼ毎日使っている」という割合と同じであることから、利用頻度が高いほど依存性も高いことが分かる。

しかし、友達づくりの手段としてメール、チャットを考えている生徒は約60%いることから、友人関係構築のツールとして確立していることがうかがえる。

(2) 3年生の状況

ア 調査学級の状況

3年生は男子139人、女子133人の計272人で、全体的に明るく元気があり特に学校行事等に意欲的、積極的に取り組む姿勢がみられる。反面、友人関係におけるストレスを抱えている生徒も多い。調査対象のクラスは、個性的ではあるが、全体的に明るく男女間の仲も良く、まとまりを感じる。しかし、友人関係において女子生徒間ではグループ化されている面もあり、その中でクラス内の友人関係において悩みを抱えている生徒も見られる。

イ 「学校楽しいと」の結果（平成27年6月実施）

6月の「学校楽しいと」の学級の平均値は表3、図2に示す結果であった。

全体的に学年平均値より高いポイントになっている。特に、「友達との関係」、「学級集団における適応感」は高い値となっており興味深い。学級内に自分の気持ちや悩みなどを話すことができる友人がいるなど、良好な友達関係を築いていることにより、学級集団における自己の存在感や安心して過ごすことができる適応感に表れているのではないかと考える。

表3 学級の「学校楽しいーと」各観点の平均値

観 点	学 級	学年平均値
友達との関係	13.2	12.7
教師との関係	10.4	10.4
学習意欲	12.1	12.1
自己肯定感	11.4	11.0
心身の状態	10.2	9.6
学級集団における適応感	13.1	12.4

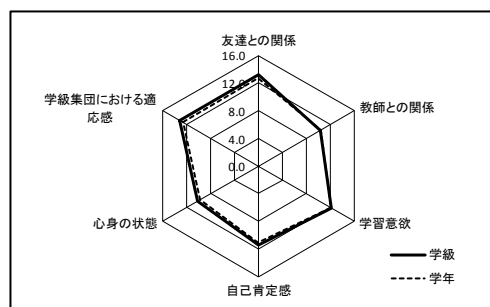


図2 学級平均値レーダーチャート

ウ 第1回目「クラスでの友人関係に関する」調査の結果（平成27年6月実施）

表4 第1回目「クラスでの友人関係に関する」調査結果の特徴的な質問項目

質 問 項 目	度数分布（人）			
	4. よくあてはまる	3. あてはまる	2. あてはまらない	1. 全くあてはまらない
・ 自分のよさに気付いている【自己理解】	3	13	16	4
・ 友達のよいところを知っている【他者理解】	22	13	0	1
・ 友達とうまくいかなかったとき、自分から友達との関係をよくすることができる【問題解決の場面】	8	20	7	1

「自己理解」に関する回答は平均値が最も低く、「他者理解」に関する回答は平均値が最も高かった。「問題解決」に関する回答は「自己理解」に次いで低い値だった。

以上から、限られた友人同士では互いのよさを認め合っているが、それ以外の友人とは、互いのよさを認めていくような関係を積極的に構築するまでには至っていないことが分かる。

エ SNSの利用の実態

メールやチャットの利用状況	ほぼ毎日使う	ときどき（週3～4）	あまり使わない（週1～2）	ほとんど使わない
	48.1 %	20.3 %	17.7 %	13.9 %
メールやチャットが利用できなくなると困る	とても困る	少し困る	あまり困らない	全く困らない
	23.4 %	29.9 %	33.8 %	13.0 %
やりとりをしている友達と親しくなった	とても思う	思う	あまり思わない	全く思わない
	30.1 %	45.2 %	15.1 %	9.6 %

「メールやチャットの利用状況」において「ほぼ毎日使う」、「ときどき」と回答している約68%は、本校3年生で自分専用の接続機器を持っている割合と同じである。自分専用の接続機器を持っている生徒のほとんどがSNSを利用しているものと考えられる。「メールやチャットが利用できなくなると困る」は53%、SNSの「やりとりで友人と親しくなれた」と75%が回答しており、SNSが友人関係構築の手段として重要なツールとして認知されていることが分かる。

4 「豊かな人間関係づくり」の指導・支援と成果の検証

(1) 実践の内容

ア 学校行事を通して（全体の取組）

本校では学期ごとに宿泊学習（1年）、修学旅行（2年）、職場体験学習（3年）、合唱コンクール、体育大会、文化祭、駅伝大会、クラスマッチなど様々な学校行事を行っている。中でも1学期末の合唱コンクールと2学期末の駅伝大会は学級対抗で行われるため、生徒も教師も練習の段階から様々な工夫を凝らして取り組み、結果に一喜一憂することも勿論だが、やり遂げた達成感なども同時に味わうことのできる行事として非常に盛り上がる。

これら2つの行事に共通しているのは、学級対抗で行われるため学級集団の和や結束力を一段と高める側面があること、全校を挙げての取組となるため学級集団を中心とした取組が可能な環境にあること、学級独自の取組の成果が直接結果に反映するため、生徒の士気が上がり活動への大きな原動力になること、等がある。また、実行委員としての生徒リーダーの存在があることも行事の成功に向けて欠かせない役割を果たしている。

具体的な活動を以下に述べる。

まず、学級の目標を、優勝という具体的なものに加え、学級集団としてどのように取り組んでいくのかなどの目標も立て（例：真剣な態度で練習から取り組む）、学級に掲示する。次に、実行委員やリーダーを複数名立て、リーダーは教師の支援の下、練習内容などを考える。教師はできるだけ生徒の自主性を尊重し、自治能力を高めていく指導に徹する。当然、練習段階において生徒同士でつまずく場面があり、その際も教師が話を聞き、学級全体の目標を見失わないように説諭を行ったり、生徒同士の話し合いなどの活動を入れたりしながら結束力を高めていく。

行事を終えての振り返りは、教科の授業及び学級全体で行い、行事を通して培ったそれぞれの思いを学級全員で共有するなどして、リーダーの労をねぎらい、次の行事や次年度の行事の成功に向けて希望を持たせる工夫をしている。

イ コミュニケーションスキル習得を図る取組（1年部）

○ 取組1 1分間スピーチ

毎日の帰りの会において、日直が自身の考えや思い、その日印象に残ったことなどを簡潔に発表する内容である。クラス全員の前で自由なテーマで発表することは、生徒にとっては意外に難しいものだが、必要に応じて担任が支援して毎日継続して行っている。

この取組を続けることで、人前で話すことを苦手としている生徒や、緊張が目立つ生徒も、予め発表準備をして帰りの会に臨むことで、少しずつ苦手意識を払拭している。その裏には担任の支援があるのだが、スピーチの内容より人前で話すことに重点を置き、その都度称賛する方法をとったことが良かったと思われる。初めの頃は、スピーチから逃れようとしていた生徒も発表できるようになっており、自信をもつきっかけとなったようである。

○ 取組2 MYP（Most Yasasikatta Person）

取組1と同様に、毎日の帰りの会で、その日のMYP＝一日の中で思いやりのある行動をした人を発表している。これも日直が自分自身の考えで発表するようにしている。

思いがけずに自分の名前が発表されることもあり、自分のよさに気づき自信が深まる効果があったのではないかと考える。

ウ トラブルの解決策を考える取組

（3年・学級活動）

3年生において、SST（ソーシャルスキルトレーニング）の活動を行った。SNS等のトラブルがこれまでもあり、友人関係においてもグループ化しており、身近に起こり得る内容であったので活動として取り入れてみた。

具体的内容はワークシート（図3）に示す通りで、避けられないトラブルが起こったとき、どのような行動をとり解決に向かえばよいのかを考える活動である。

活動方法はいくつか考えられるが、本時では、トラブルの焦点を一つに絞り、その解決策について、まずグループで考え、そこで出た意見を基に個で考えていく方法を取った。話し合いの場面では、実際にどのような方法で、どのような点に留意して実行するのかという視点をもたせ、具体的な行動につながる話し合いになるように配慮した。生徒たちは、グループで考えを共有しながら、自分自身の解決のための実行策を考えて真剣に取り組んでいた。他の人の意見を聞くことで、考えの幅を広げることもできたのではないかと考える。

図3 ワークシート

②トラブルの解決策を考える(中学校)			
ワークシート			
()年()組()号 名前()			
 仲のよかった友達とけんかをしました。理由はわたしがその子の悪口を言っているからだと思います。しかし、わたしは悪口を言ったことはありません。そのうち誤解も解けると思えばいいのですが、クラスの中で「あの子、悪口を言いふらしているんだって。」と言われるようになり、みんなから無視をされるようになってきました。どうやら友達が他のクラスメイトに言っているようです。このままでは自分の立場がますます悪くなり、仲間はすれになってしまいそうです。			
③ <u>こんなとき、あなたならどのようにして解決しますか？</u>			
1. 問題をはっきりさせる			
「わたし」が困っていることは？			
どうしたいですか？			
2. 解決策を考える			
解決策1	⇒ 結果1		
解決策2	⇒ 結果2		
解決策3	⇒ 結果3		
解決策4	⇒ 結果4		
4. 自分にできそうな解決策は何番ですか？()			
5. 実行する手順を考える			
いつ	⇒ どこで	⇒ だれに	⇒ どのように
◎実行する前に、自分の心に言い聞かせることは？			
6. 成果を確認する → うまくいった！・次の解決方法を考える。			



(2) 第2回目「クラスでの友人関係に関する」の調査結果（平成27年11月実施）

6月の調査で特徴的な結果であった項目を12月調査の結果と比較したとき、表5、表6に示す結果となった。

表5 第2回目「クラスでの友人関係に関する」調査結果の1回目との比較（1年）

質 問 項 目	度数分布（人）			
	4. よくあてはまる	3. あてはまる	2. あてはまらない	1. 全くあてはまらない
・ 自分のよさに気づいている【自己理解】	3 ↑	14 ↓	14 ↑	2 ↓
・ 自分の性格について分かっている【自己理解】	9 ↓	22 ↑	2 ↓	0
・ 友達のよいところを知っている【他者理解】	20 ↑	11 ↓	1 ↓	1 ↑
・ 友達を区別することなくあいさつを交わすことができる【表現行動】	14 ↑	10 ↓	8 ↑	1 —

表6 第2回目「クラスでの友人関係に関する」調査結果の1回目との比較（3年）

質 問 項 目	度数分布（人）			
	4. よくあてはまる	3. あてはまる	2. あてはまらない	1. 全くあてはまらない
・ 自分のよさに気づいている【自己理解】	2 ↓	19 ↑	11 ↓	3 ↓
・ 友達のよいところを知っている【他者理解】	19 ↓	15 ↑	1 ↑	0 ↓
・ 友達とうまくいかなかったとき、自分から友達との関係をよくすることができる【問題解決の場面】	9 ↑	15 ↓	8 ↑	1 —

「自己理解」、「他者理解」に関する質問において、1年生3年生では正反対の結果となった。数値的に大きな増減ではないが、平均値でみると1年生では「自己理解」が減少、「他者理解」が増加、逆に3年生では「自己理解」が増加、「他者理解」が減少となっている。

日々の教育実践において、1年生では友人の考えや個性を知ることが重要であると位置付けた結果であり、これに自分自身と向き合う活動が伴えば、自己理解につながるのではないかと考える。

3年生では自己肯定感を高めながら自分自身の理解を深め、自己理解と同時に他者理解も図られたと考える。

一方で「他者や集団への適応」に関しては、自己理解や他者理解に変化が現れる中で、友人関係が少しずつ絞られてきていることが考えられる。つまり、限られた友人同士で関係を深める反面、それ以外の友人関係に広がりはありません様子が見えてくる。なお、1年生と3年生における学校生活環境の違いや、年齢に応じた社会性や協調性の違いなども考慮する必要はあるが、友人関係を広げる意味での日々の教育実践も求められる。

5 研究成果と今後の課題

(1) 研究成果

ア 学校行事への取組が学級集団の質を高める重要性を改めて認識することができた。行事へ向かう過程において生徒の主体性を尊重しながら、自主性や自治的能力を高めていく活動が、学級集団の質を高める一つの方法であることが分かった。

そこには、学年や学級の雰囲気など実態に応じた取組が必要で、生徒の実態を見極めた上で、生徒自身が所属感や達成感を味わえるような、今後も継続した柔軟な取組が求められると考える。

イ SSTの活動を通して、生徒自身の感想から、これまで友人関係におけるトラブルを他人事のように思っていたが、実際にシミュレーションをすることで問題解決の糸口を知ることができたとあった。漠然としていたトラブルへの対処法を学習によって具体的な知識として身につけることで、今後の生活に自信をもつことができ、自己肯定感を高めることにつながるのではないかと考える。

(2) 今後の課題

ア 学級集団の人間関係において、限られたグループでの関係にとどまってしまう傾向が見られた。自己理解や他者理解を深めることと同時に、他者や集団への適応という点での高まりを今後深めていくことが必要だと考える。

イ 学校行事に向けての取組だけでなく、日々の実践による継続的な活動を取り入れていく必要を感じた。時間的な制約など実践が困難な要素はあるが、短学活などで学級集団への適応感や所属感を高めていくような手立てを講じることも必要だと考える。

鹿児島県立加治木工業高等学校
教諭 春成 育代

1 はじめに

明治43年（1910年）に始良郡立工業徒弟学校として創設された本校は、105年の伝統と歴史を誇る工業の専門高校で6設置学科があり、1学年7学級の計21学級、生徒在籍数は786人（男子691人 女子95人）である。本校への進学理由として、就職率の良さはもちろん資格取得やものづくりに力を入れていること、部活動が盛んであること、地域に根ざし、また、親や兄弟の出身校であること、を挙げる生徒が多い。そのため、目的意識をもち学校生活を送る生徒が大多数を占める、活力みなぎる学校である。

専門科目のうち特に実技科目が複数教科担任制であり、生徒も班別編制であることなどから教職員の指導・支援が届きやすく、生徒の些細な変化に気付いた場合の情報共有が速やかにでき、担任のみで抱え込まない環境下にあることは、本校の強みである。

2 本校における生徒指導上の課題

(1) 生徒の実態

- 進路変更や不登校状況を呈する生徒、生徒指導上の問題行動数は年間ごくわずかである。
- 明るく素直な生徒が大半で、生徒も教職員も男性の比率が高いことから、全体的にいい意味で「父性」の強い一例えば、「ならぬことはならぬ」といった一教職員側の雰囲気を感じ、それに応え成長する生徒の姿が見られる。

(2) 生徒指導上の課題

- 県のネットパトロール事業で「リスク低レベルの書き込みがある。」という指摘を受ける生徒もいる。また今年度は、被害者・加害者いずれも本校生徒の「ネット上での誹謗中傷」案件が発生した。その案件以外に本年度、生徒がネット上のトラブルに巻き込まれる、もしくは引き起こしたケースを見聞きしたことがあるという教職員の割合は58.9%であった（独自アンケートによる）。
- 生徒指導部による講話、教科科目「情報技術基礎」における情報モラル・ネチケット等の指導、人権同和教育の統一LHR等、「ネット上での振る舞い方」についての教育を従来通り継続していく必要性がある。
- 約6割超の教職員が生徒のコミュニケーション能力の低下を感じ取っている。卒業後の進路として実に75%の生徒が就職をするという本校の実態に鑑みても、適切な声量で挨拶を交わす、会話が出来る、といった現実世界における非言語情報中心のコミュニケーション能力、さらには目上の方との会話が出来る、といった同世代同士に限らない人間関係を構築する力を身に付けることは必要である。

3 調査対象学級の状況とSNS等利用の実態

(1) 概観

- 1年X組は男子28人、女子12人の計40人。
- 雰囲気としては総じて穏やかで、学級内の人間関係も友好的であるように見受けられる。

(2) 調査結果

ア 6月実施の「学校楽しいと」

X学級・本校1学年の平均値は表1、図1に示す結果であった。

表1 「学校楽しいと」各観点の平均値比較

	X組	学年
友達との関係	12.4	12.4
教師との関係	10.8	12.3
学習意欲	12.0	11.4
自己肯定感	10.8	10.3
心身の状態	9.3	10.3
学級集団における適応感	11.9	11.9

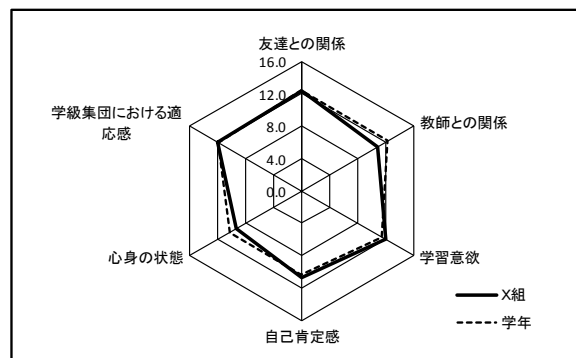


図1 学級平均値レーダーチャート

- 「心身の状態」と「教師との関係」の平均値が学年の平均値に比べるとやや低めであるが、それ以外はさほど差のない結果であった。個別の結果については、特に気になる生徒は見受けられなかった。また、X学級においては、「いじめ」に関する項目の該当者が全くいなかった。

イ 6月実施の「学校生活・インターネット利用・友達関係に関する調査（SNS利用の実態）」いくつかの項目について、X学級・本校1学年・県高1の平均値を表2に示す。

表2 SNS利用の実態について（県平均と差がある項目）

○ 平日のメールやチャットの利用時間について					○ 休日のメールやチャットの利用時間について				
	2時間以上	1～2時間未満	30分～1時間未満	30分未満		2時間以上	1～2時間未満	30分～1時間未満	30分未満
X学級	10.8%	37.8%	32.4%	18.9%	X学級	35.9%	33.3%	23.1%	7.7%
本校1学年	15.3%	38.4%	30.6%	15.7%	本校1学年	40.6%	35.7%	15.2%	8.6%
県下高校1年	18.8%	35.0%	27.1%	19.0%	県下高校1年	44.0%	29.6%	15.0%	11.3%

○ メールやチャットを使い始めてからの経験年月について					○ メールやチャットをする友達の人数について				
	2年以上	1～2年	6か月～1年	6か月未満		9人	10人	11～20人	21人以上
X学級	44.7%	21.1%	7.9%	26.3%	X学級	2.6%	10.3%	7.7%	25.6%
本校1学年	33.5%	25.2%	9.5%	31.8%	本校1学年	1.2%	4.1%	12.3%	25.4%
県下高校1年	28.5%	20.5%	14.4%	36.6%	県下高校1年	0.9%	9.8%	9.2%	17.2%

○ メッセージのやり取りで困ったときは親や先生に相談するようにしているかどうか。				
	とても気をつけている	気をつけている	あまり気をつけていない	全く気をつけていない
X学級	5.1%	33.3%	35.9%	25.6%
本校1学年	7.5%	16.2%	28.2%	48.1%
県下高校1年	8.1%	18.0%	35.3%	38.6%

- ほとんどの項目において、X学級は県下1年生平均値に近い値であった。
- 「平日及び休日のメールやチャットの利用時間」は短い傾向、「メール等をする友達の人数が10人以上」とする生徒の割合は高めである。日頃は部活動にいそしみつつ、クラスや部活動での連絡手段としてメール等を駆使している生徒像が類推できる。
- 「メッセージのやりとりで困った時は親や先生に相談するようにしている」生徒の割合が高めなのは、小中学校時の情報教育の成果といえよう。また「メール等の使用年月は2年以上」とする生徒が44.7%を占めることから、小・中学時代にある程度のトラブルとその解決のプロセスを通過しているのではないかと考えられそうだ。

ウ 6月実施の第1回目「クラスでの友人関係に関する調査」否定的回答の度数分布が多かった質問内容の3項目を表3に示す。

表3 第1回目「クラスでの友人関係に関する調査」で否定的回答が多かった質問項目

質問項目	度数分布（人）			
	4. よくあてはまる	3. あてはまる	2. あてはまらない	1. 全くあてはまらない
・ 自分のよさに気付いている【自己理解】	2	18	19	1
・ 自分から友達をつくらることができる【適応的行動】	8	17	14	1
・ 友達とうまくいかなかったとき、自分から友達との関係をよくすることができる【問題解決の場面】	2	25	13	0

- 個別の結果を見た時に、レーダーチャート上全ての観点で50%を下回るような特に気になる生徒は見受けられなかった。上記表3で「全くあてはまらない」と回答した生徒は同一人物であるが、部活動には意欲的に取り組んでいることから、長期的視点で見守ることとした。
- 学級全体としてよりよい「豊かな人間関係づくり」を進めるための課題は、「自己理解」、「適応的行動」の観点を高める取組である、と捉えた。

4 対象学級に対する「豊かな人間関係づくり」の指導・支援と成果の検証

(1) 実践の内容

ア 授業における取組

- X学級には、アグレッシブタイプはほとんどいないが、ノンアサーティブな自己表現をする生徒が多かったため、「私はこう考える。」とIメッセージを発信できるようにアサーション・トレーニングの一部を実施した。

イ SHR等での取組

- 生徒同士のコミュニケーションのきっかけとするため、SHR前の朝読書の時間に約1週間分の新聞を持ち込み、自由に閲覧させた。

ウ 学校行事等の活用

- 学校行事は、クラス単位のみならず学科単位でも取り組むため、必然的に上級生と下級生の交流も生まれやすく、また生徒主導の場面も多くなるため、生徒の特性を引き出すように指導・支援した(担任経験者を対象とする独自のアンケート調査の結果、教職員は生徒の成長を学校行事に期待していることが分かった)。

エ LHRでの取組

- 「進路」をテーマに構成的グループエンカウンターを取り入れたLHRを実施した。エクササイズは、「これまでにないタイプの新しい『職業』」を自由に考えさせる内容で、班ごとに自分の考えた職業を発表させてKJ法でまとめさせた。
- 自己理解の一助としてエゴグラムを実施した。

オ 生徒の「交友関係」と「学級観」の意識調査の実施による生徒理解

- 本年度の調査研究は「豊かな人間関係づくり」を「自己と他者の理解を深め、互いに認め合って交流できる関係づくり」と定義している。そこで、「交友関係」に関する意識調査と、「学級観」に関する意識調査を実施し、指導・支援の資料として活用した。

カ 「見守る」そして「必要な時に支援する」を心得た指導

- 実社会で必要とされる適応的行動や問題解決能力は、教えるというより実生活の中で身に付けていくものであり、人間関係でのトラブルを起こさないように配慮するのではなく、逆にトラブルに直面したときを当事者及び学級全体の成長に資する機会と捉えて支援する姿勢で指導した。

(2) 実践の検証

ア 11月実施の第2回目「クラスでの友人関係に関する調査」

6月の調査で否定的回答の度数分布が多かった質問内容の3項目は、表4に示す結果となった。

表4 第2回目「クラスでの友人関係に関する調査」の結果

質問項目	度数分布 (人)			
	4. よくあてはまる	3. あてはまる	2. あてはまらない	1. 全くあてはまらない
・ 自分のよさに気付いている【自己理解】	2 ー	17 ↓	18 ↓	2 ↑
・ 自分から友達をつくらることができる【適応的行動】	12 ↑	13 ↓	16 ↑	0 ↓
・ 友達とうまくいかなかったとき、自分から友達との関係をよくすることができる【問題解決の場面】	4 ↑	20 ↓	15 ↑	0 ー

3項目の6月調査結果(表3)と11月調査結果(表4)について、度数分布の結果をグラフ化したものを、図2・3に示す。

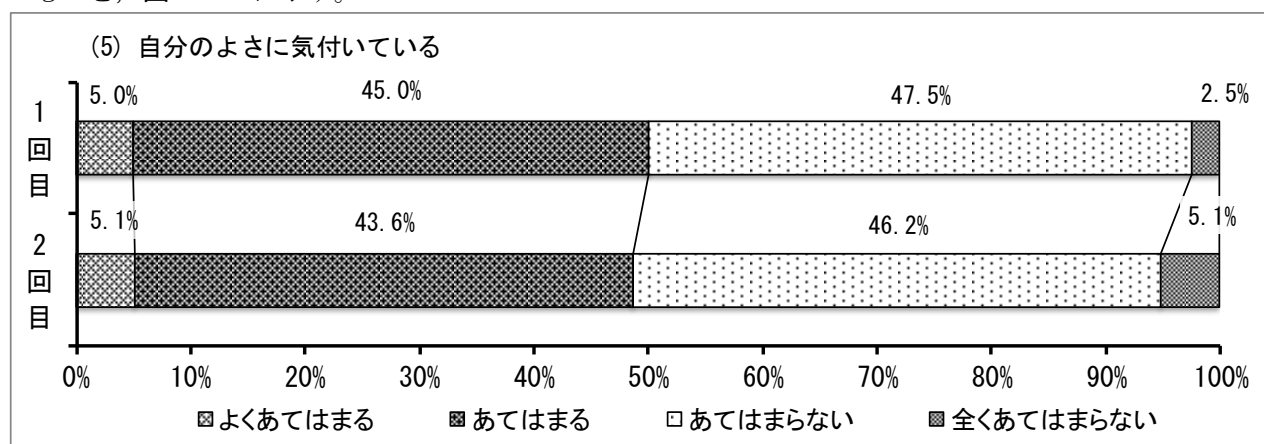


図2 「クラスでの友人関係に関する調査」の(5)の回答の比較

- 全体的にはあまり変化が見られない結果であった。評価が低下した生徒の個票を見ると、①小規模な中学校出身者が規模の大きい高校で萎縮している状態にある、②部活動で思うように活躍できていない、③ある意味天真爛漫すぎる生徒が周囲の空気を読んで行動できるようになったと思われるケースが、あった。高校に入り改めて「自分のよさとは何か。」を模索していると考えられる。

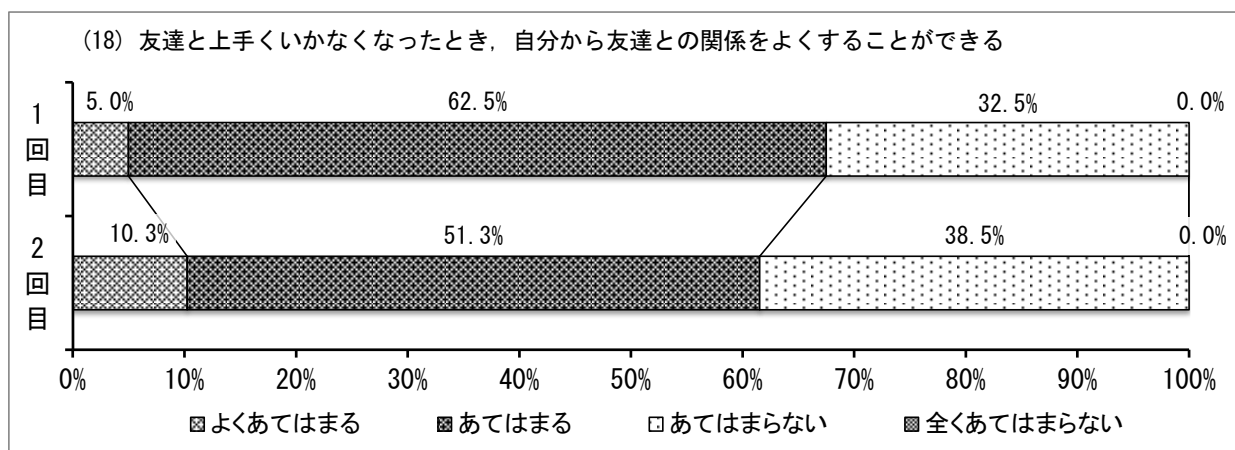
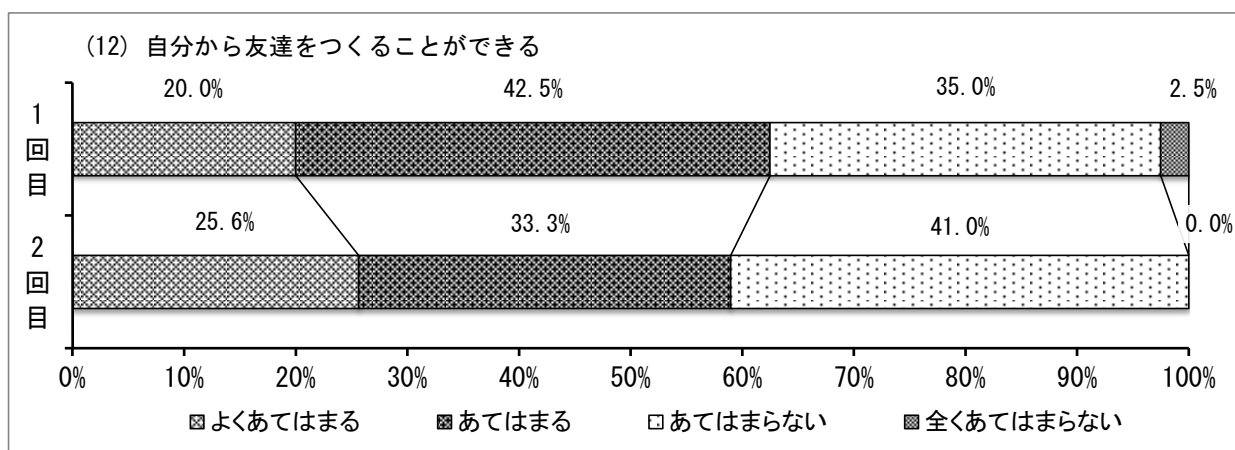


図3 「クラスでの友人関係に関する調査」の(12)、(18)の回答の比較

- 両項目とも「よくあてはまる」が増加した一方、「あてはまる→あてはまらない」に移行した割合が高い結果となった。6月の段階ではまだまだ人間関係が築かれていない状態であったが、時間経過とともにお互いの多様な面を知り合うようになり、その上で「友達を作ろう。」「関係を良くしよう。」とトライしてみたが、「上手くいかなかった。」というケースもあったと考えられる。また、各方面の情報を統合すると、学級を超えての友人関係に苦勞し、そのことに言及した生徒もいたようであった。

イ 生徒Aの傾向と課題、指導・支援の経過

生徒Aは、2回目の調査で14項目全てにおいて「あまりあてはまらない」と回答したケースである。Aの1回目と2回目の3観点（「自他の理解」、「他者や集団への適応」、「他者と交流する実践力」）の達成度の割合は表5に示す結果となり、図4はそのレーダーチャートになる。

表5 生徒Aの「豊かな人間関係づくり」の3観点の達成度

観 点		1回目	2回目
1	自他の理解	65%	50%
2	他者や集団への適応	75%	50%
3	他者と交流する実践力	65%	50%

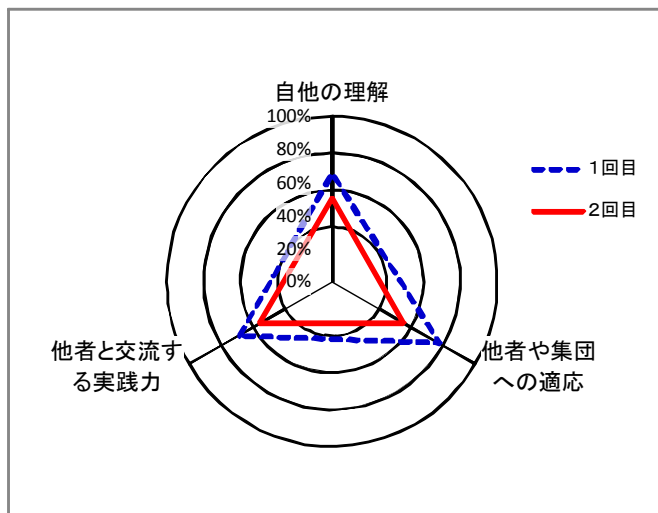


図4 生徒Aの3観点レーダーチャート

- 生徒Aは、欠席や特に不適切な言動等は見られないが、これまでの価値観とは異なるタイプの生徒と関わる中で、良くも悪くも自分はこれで良いのだろうかかと自問自答しているようである。担任及び部顧問は生徒Aに対して、内観及び自らの意志を明確に示すことの必要性を指導するとともに、学級内と部活動内での両方において周囲の人間関係を配慮（グループ編成等）して対応した。現在、担任・複数の教科担任・部活動顧問が連携した指導・支援をしており、経過観察中である。

ウ 生徒の「交友関係」の意識調査の結果と考察（平成 27 年 10 月末～11 月に実施）

- 名表に○印を付ける形式の補足質問も実施したところ、入学後半年以上たった時点で「未だ全員の名前と顔が一致しない」と答えた生徒が約 3 割いることが判明した。小中学校と異なりネームの着用もなく、教室の掲示物も必要最小限であり、学級名簿を見る機会もほとんどない高校生にとって、お互いの名前と顔を一致させるには教職員側の工夫・支援がより一層求められていることが明らかとなった。
- 「これまでもあまり話をしたことがなく、今後も話をすることはないかもしれないクラスメートがいる」と答えた生徒が 3 割弱存在することが分かった。内訳は、異性との関わりを避ける生徒、同性であっても特定の生徒を避ける生徒、非常に恥ずかしがりの性格の生徒などであった。ある意味閉じられた学級という社会の中で円滑な人間関係を築くためには、お互いの存在を無視してはならない、ということは伝えていく必要があると考える。
- 生徒からの聞き取りで「入学前後に 1 学年の L I N E グループが立ち上がり、特に 1 学期は特定の中学校出身者による書き込みが多かった。」ということが分かった（X 学級は、学年の L I N E グループに参加している生徒が 38.5%，以前参加していた生徒が 18.0%，参加していない生徒が 20.5%，グループの存在を知らない生徒が 15.4%という結果）。学校としては、「ネット上での振る舞い」が現実世界での振る舞いと切り離されるものではないことや、誹謗中傷・人権侵害などあってはならないということを継続して指導し、また、学級だけでなく部活動も含めて L I N E グループを生徒自ら立ち上げて交流している実態を全教職員が認識した上で日々の指導に当たっていく必要があると考える。
- 一人だけ「SNSでのつながりがないため話すきっかけが得られない」とする生徒がいた。現実世界でのつながりよりネット上の世界が優先している事例であり、今後はこのようなタイプの生徒も増えてくるかもしれないことを留意して指導・支援をしていく必要があることが分かった。

エ 生徒の「学級観」の意識調査の結果と考察（平成 27 年 10 月末～11 月に実施）

(7) 「クラスメートに対する意識」に関する内容

表 6 「クラスメートに対する意識」に関する調査結果

○ せっかくなので、可能な限り全員と直接会話ができるようにはなりたい。そのために努力してみようという気持ちもある。	33.3%
○ これまで会話したことのないクラスメートでも、直接会話できるきっかけさえあれば、自分は会話できていると思っている。だから、どちらかという自然の成り行きに任せたい。	38.5%
○ 単なるクラスメートなので、別に無理して全員と直接会話しなくても構わないし、必要最低限の事が話せばいいと思っている。トラブルだけは避けたいと思う。	28.2%

表 6 の調査結果から、生徒は学級内の人間関係構築を前向きに捉えていることがわかった。しかし、別の調査結果から「コミュニケーション能力は低い方だ」と感じている生徒も 6 割いることが分かったことから、コミュニケーションの取り方には「話をする」以外にも、挨拶を交わす、視線を合わせる、といった方法もあることを伝えていきたいと考えている。

(4) 「SNS の使い分けの意識」に関する内容

SNS 上の会話（ツイッターや L I N E での会話）と顔を見ながらの「直接会話」について、使い分けをしているか意識調査をした結果、表 7 に示す内容となった。

表 7 「SNS の使い分けの意識」に関する調査結果

質問項目	対象 1	対象 2
○ 本当に大事なことは、直接会話したり電話で話すようにしたりしている。	38.5%	71.8%
○ 本当に大事なことからこそ、敢えて SNS 上の会話でやり取りしている。	25.6%	17.9%
○ たわいも無い内容は、直接会話や電話で話す方が楽だからそうしている。	15.4%	12.8%
○ たわいも無い内容を SNS 上でダラダラとしたやり取りすることが多い。	48.7%	25.6%
○ SNS 上でのやり取りはしない。	5.1%	5.1%

対象 1：クラスメートなど、対象 2：家族・友人・恋人など近い関係にある人（複数回答可）

この結果から、約5割の生徒がたわいも無い内容をSNS上でクラスメートとやり取りをし、約7割の生徒が本当に大事なことは直接に話していることが分かった。また、「大事なことからそSNS等でやりとりする。」と回答する生徒がいることが明らかとなったが、このことは「音声情報は残らない→文字情報は残る」と推察できる。このことから、X学級の生徒は、SNSのツールを場面に応じて使い分けしていることが明らかとなった。

(7) 「学級内の人間関係の構築の意識」に関する内容

a クラスメートと直接会話するきっかけとなった出来事について質問

調査の結果、「座席」と回答した生徒が最も多く、以降は「学習行動」、「学校行事」、「友人の友人など」の順であった。「座席が近い生徒とまず話をする」のは至極当たり前のことであるが、4月当初は名簿順に着席することが多く、また席替えの頻度はクラスによってそれぞれであり、生徒同士の関係を育む方策として捉える重要な視点になることが明らかとなった。

b クラスメートと直接会話したり、親交を深めたりするのに役だった学校行事についての質問

調査の結果、「4月末の遠足」と回答した生徒が最も多く、以降は「7月のクラスマッチ」、「入学式直後のLHRなどの自己紹介」の順であった。学校行事の精選により「遠足」を実施しない学校もあるが、本校では学科別で4月末に実施している。学科によっては先輩・後輩間での自己紹介をするなど、本校生の自覚をもたせる意味もある。回答の結果からも、屋内外でのレクリエーションも実施するので、入学して約1ヶ月間の緊張状態の緩和とクラスメートとの交流にも役立っていると考えられる。回答の全体的な傾向から、1学期実施分の学校行事等が生徒の人間関係構築に役立っていることが再認識できた。

5 研究成果と今後の課題

(1) 研究成果

ア 「学校楽しいと」等の結果を通じて教師側が効果的な面談等を実施できたとともに、生徒自身の自己理解を深めるきっかけにもなった。また、教師側の生徒に対する気付き・見立てを補完する検査結果も得ることができ、質問紙による調査法の有用性を示すことができた。

イ 今回調査対象としたX学級では、「クラスでの友人関係に関する調査」の結果に大きな変容は見られなかったが、別の調査を実施したことや教師の連携した指導・支援により、生徒の人間関係の構築を図っている姿を垣間見ることはできた。

ウ 高校生ともなれば、教師の積極的な関わりがなくとも、ある程度の人間関係を築いていくことができる。しかし、教師の支援を必要とする生徒もやはり一定数存在することを踏まえ、学級開きの時から、座席配置や学校行事等をより積極的に活用（特に一学期は注力）していくことで、生徒の人間関係を構築していく力がより高まると考えられる。

(2) 今後の課題

ア 今年度は本研究のために「学校楽しいと」、「学校生活・インターネット利用・友達関係に関する調査」、「クラスでの友人関係に関する調査」を実施した。「学校楽しいと」のように継続的に実施できるアンケートを実施し、次年度以降も効果的な教育相談・学級経営に生かしていきたい。

イ 現在、大きな問題は起こっていないが、自己理解が不十分であったり、自己肯定感が低かったり、コミュニケーション能力に自信のなかったりする生徒がいる。コミュニケーション能力が低下してきている生徒をいかに指導・支援していくかをテーマに、構成的グループエンカウンターやコーチングスキル、アサーション・トレーニングなどの校内研修を行ったり、実際に実施した効果を検証したりして、その成果を実際の授業等に生かしていくことが必要である。

ウ 今年度は特に「保護者の関わり」についての研究・考察が不十分であった。この視点からのアプローチについても検討したい。